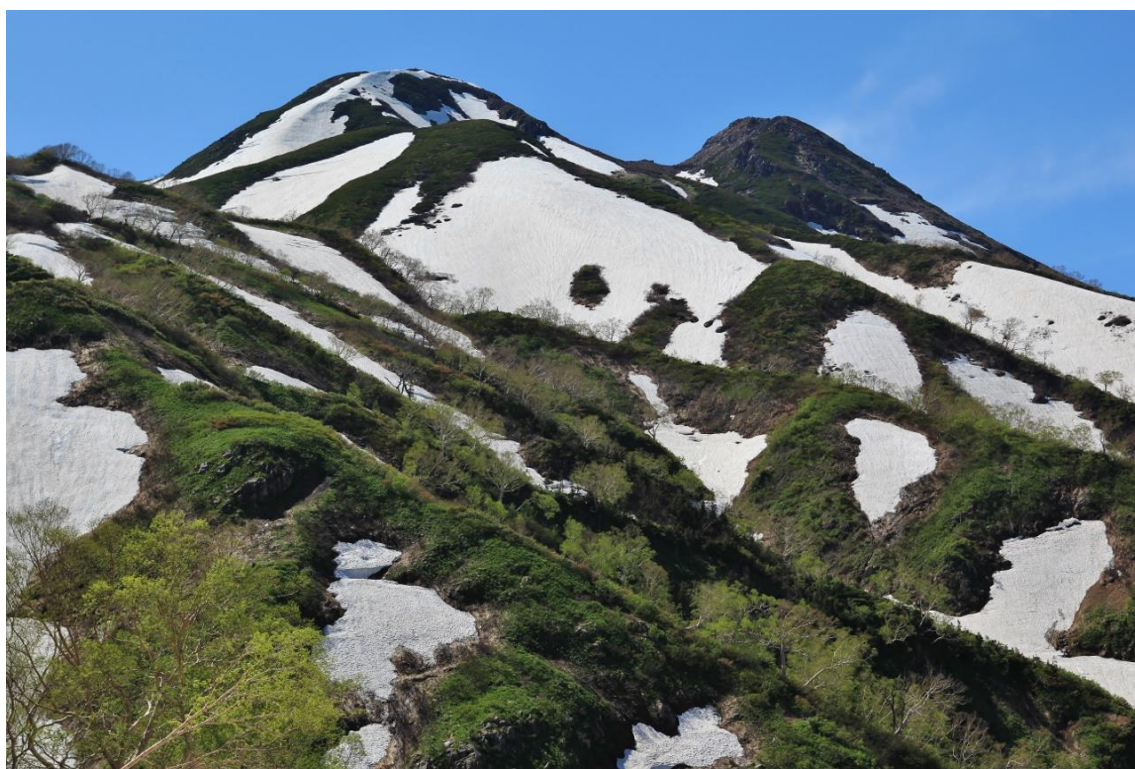


やまどい



平瀬道からの白山

金沢大学ワンダーフォーゲル部 OB 会会報 vol. 34

目 次

	(頁)
OB 会会長あいさつ	22 期 黒崎敏男 1
【OB 会活動便り】	
東海支部報告 17 期渡邊和文 17 期小島 敬 16 期川端俊朗 21 期竹本 彰	2
近畿支部報告 11 期加藤忠好 15 期三宅 毅 15 期宇野 潔 5 期金岩 孜	5
第 22 回野沢温泉スキー合宿 2019	11 期 青柳健二 13
2019 年小屋作業	22 期 黒崎敏男 17
【同窓会便り】	
50 年後の卒業旅行	9 期の仲間 19
令和元年 15 期同窓会イン桑名市	15 期 祖父江直久 21
17 期ミニミニ同期会 in ウランバートル	17 期 小島 敬 22
【現役より：夏合宿報告】	
北海道	64 期 三嶋歩夢 26
奥穂高	64 期 橋本真樹 27
槍ヶ岳・蝶が岳	64 期 木戸浦悠斗 29
槍ヶ岳	64 期 加藤豪琉 29
南アルプス	64 期 吉岡彩乃 30
八ヶ岳	63 期 中山晋志 31
【投稿のページ】	
息子との朝日連峰縦走	4 期 佐藤秀紀 33
北ア 唐松・五竜の縦走記	6 期 合津 尚 35
仏教伝来の道を旅する・シルクロード編	8 期 篠島益夫 37
近年の、外国での記憶から：承前（以前からの続きを）	11 期 長岡正利 41
ナマクワランド紀行「やらせ」「仕掛け」	15 期 舟田節子 45
富士山ゼロメートル PW 報告	15 期 増田富雄 49
【編集後記・事務局より】	24 期 仲村正一

表紙の言葉 <平瀬道からの白山>

平瀬道は砂防・観光に次いで 3 番目に利用者が多く、ブナやダケカンバの原生林を行く道で、山頂を東方から眺めることになり御前峰と剣ヶ峰がラクダのこぶのように並んでいます。

(撮影：大倉山付近・6 月中旬、15 期上馬康生)

継続の意義

OB 会会長 22 期 黒崎 敏男

小生、訳あって今春から日本山岳会の正会員となつてしまい、会合などに参加するようになりましたが、100 年以上の歴史を有する同会も本会同様に会員の高齢化に伴う活動力縮小と新規入会の停滞の状況に頭を悩ませつつも、公益社団法人として野外活動の普及促進、調査活動を伴う海外遠征や山岳文化の発展等に努力されておられます。

そもそも団体の性質が全く違うので本会とは比較すべきではありませんが、本会の維持・運営にも参考とさせてもらうため大先輩方から薫陶を受けております。

1950 年代から盛んになった大学のワンダーフォーゲル活動で育った皆様も OB・OG となられ、最高齢の先輩は 80 歳代と、現役大学生が自分のひ孫の年代となられた方もいらっしゃるのではと思いますが、当該活動が最盛期だった時代に青春の時期を過ごされたいわゆる団塊の世代の先輩方の力はその時代時代のあらゆる活動を支えるパワーを発揮していたのだと感じます。そうしたパワーも時間の流れとともに落ち着いた関係か、各大学の様々な OB 会活動もさすがに活動の最盛期を過ぎた感はあるようです。

しかしながら、第 1 次ベビーブーマー、現在の 70 歳代の皆様の若さにはいまだ驚かされることが多くあります。本文の小屋作業の項で紹介しておりますが、今や上級者・熟練者向きとなつてしまった高三郎山に今春登山された先輩は 70 歳でありましたが、こちらがへばっていた中、平然としておられるお姿を見て、「鍛錬の持続は人生を豊かにする」というイメージにつながったような気がしました。

我々が日常いかに安らかに生活をしているかは病気、けが、事故、災害などに遭遇した際にしかわかり得ぬものかも知れません。過信せず可能な範囲で心身の力を維持して、好きな活動を継続し、残された人生を十分に楽しみたいと思います。

さて、「やまざと」は本号から新しい執行部で発行させていただきますが、これまでの編集方針はほぼ引き継ぎます。ただ、経費削減のため、写真の画質など従来に比べ簡素に見える部分があるかもしれませんがその点ご容赦ください。

表紙写真は上馬康生さん（15 期）に今後 4 回分担当頂きます。見る方向で様々な姿を変える白山ですが、たくさんある白山登山道の中で四方からの眺めを紹介してもらいます。また、題字は中川晃成さん（23 期）によるものを引き続き掲載させていただきますが、中川さんは今秋、日展入選されたことを併せてご報告させていただきます。

多くの会員が携わって支えてきた、この伝統ある会報誌「やまざと」が会員相互の親睦の絆となることを祈念しております。

東海支部報告

苗木城跡PW

(報告者 17期 渡邊 和文)

時：2018年11月17日(土)

メンバー：L. 渡邊(17)、森島(4)、野村(12)、
柴田夫妻(13)、川端(16)、小島(17)、吉田(17)、
安井(22)、黒岩(24)

行程：JR 中津川駅 10:15 集合、(タクシー)⇒
10:30 遠山資料館、苗木城跡ガイドツアー⇒
12:30 四十八曲がり→玉蔵橋→中津川駅前→
13:30 「うなぎ料理山品」(昼食懇談)
14:30 解散。

中山道中津川宿近く、木曽川右岸の城山に築かれた苗木城。戦国時代、織田と武田に挟まれながら生き延びた遠山氏。徳川に付いて改易されることなく十二代続く。明治維新を迎え、城が解体されたことを史料館で学ぶ。

城山にあった巨石を巧みに使って築いた石垣が残る城跡を、ガイドさんの示すCG写真と礎石で建物の姿を思い浮かべながら進む。頂上の巨石の上に天守の柱組が忠実に再現されて展望台になっている。周囲の樹木が伐採され、快晴の空のもと、南に笠置山、東正面に恵那山、さらに木曽駒ヶ岳と眼下に木曽川まで望める絶景を堪能。



〈苗木城跡 三の丸大矢倉の石垣前にて〉

ガイドさんと別れ、落ち葉の積もる城山の急斜面の四十八曲がりの道を下る。木曽川右岸ののどかな車道を進み、振り返ると城山頂上の柱組が我々を見下ろしている。玉蔵橋を渡り、中津川駅前を通り、うなぎ料理山品に到着。それぞれ好みのウナギ料理と飲み物で腹を満たしながら歓談。

栗きんとんを買って帰路に就く。歴史と眺望、美味を堪能したPWでした。

金山巨石群&蛍石採集PW

(報告者 17期 小島 敬)

時：2019年3月16日(土)

メンバー：13名、車4台

L. 小島(17)、森島(4)、中野(8)、野村(12)、
柴田夫妻(13)、佐野(15)、川端(16)、渡邊(17)、
吉田(17)、竹本夫妻(21)、黒岩(24)

行程：名古屋駅⇒郡上八幡IC⇒【金山巨石群】⇒
(昼食) 道の温泉駅「かれん」⇒【蛍石採集】笹
洞蛍石鉱山跡⇒「道の駅 平成」⇒名古屋駅

【金山巨石群】〔岐阜県下呂市・岩屋岩陰遺跡〕
金山巨石群リサーチセンター調査員の徳田紫穂さんに現地での解説をお願いしました。徳田さんたちは、太陽の運行と縄文時代の金山巨石群との関連性を20年以上研究してきました。その研究成果として、これら巨石群が太陽暦を観測する天文台として機能していたという仮説を提示しました。1時間半のガイド時間をゆうに越え、徳田さんが遺跡への熱い想いを語ってくれました。

【蛍石採集】〔笹洞(ささぼら) 蛍石鉱山跡〕
案内は、蛍石採集ツアーガイドの中島真一郎さん。笹洞白山神社で車を停め林道を2km歩いて鉱山跡へ。廃坑手前の河原で、みんな童心に帰って蛍石を探しました。紫外線ライトを当てると蛍石の部分が光るので、蛍石と石英を判別できます。1時間ほど「宝探し」をした後、廃坑内へ。採掘時には、トロツコから零れ落ちた蛍石が砕けて坑道内に積もっていきました。坑内は漆黒の闇。中島さんが紫外線ライトで足元を照らすと、ところどころ光りました。まるでアニメ『天空の城ラピュタ』での、飛行石の洞窟の1シーンのようでした。



〈笹洞蛍石鉱山跡・坑道入口にて〉

三島由紀夫の『潮騒』を訪ねるPW

(報告者 17期 小島 敬)

時：2019年4月13日(土)

メンバー：8名

L. 小島(17)、森島(4)、中野(8)、柴田夫妻(13)、吉田(17)、黒岩(24)、益川(26)

行程：鳥羽マリンターミナル⇒神島港→【昼食】
〔民宿「山海荘」〕→【寺田氏宅】〔三島由紀夫 逗留先〕→八代神社→神島灯台→監的硝跡→ニワの浜(カルスト地形)→古里の浜→鏡石→時計台跡の喫茶店→神島港⇒鳥羽マリンターミナル

絶好の島日和でした。晴れ渡って穏やかな伊勢の海を眺めながら、『潮騒』ゆかりの場所をたどって、神島をゆっくりと一周しました。



〈神島港「三島文学 潮騒の地」の前で〉

【民宿「山海荘」で昼食】豪勢な「潮騒 幕の内」をいただきました。近海で獲れた新鮮な魚介や島で採れた野菜をギュッと詰めた内容でした。特にグレ(メジナ)の煮魚が絶品でした。あまりのおいしさに酒盛りが始まり、PWはこれからだというのに、打ち上げモードに突入してしまいました。

【寺田氏宅を見学】神島を舞台にした『潮騒』執筆の為、1953年に2度、三島由紀夫は漁協組合長だった寺田宗一さんの家に滞在しました。今回、民宿「山海荘」にお願いして、三島が逗留していた寺田さんの2階の4畳半の畳部屋を見せていただきました。部屋には三島が執筆に使っていた机や、三島が寺田さんに贈った初版本などが展示されていました。案内していただいた女性は、山口百恵がロケに来た時の様子も話してくださいました。百恵ファンとしては、三島より百恵の話の方が興味深かった。

高賀山PW

(報告者 16期 川端 俊朗)

時：2019年6月22日(土)

メンバー：L. 竹本(21)、中野(8)、柴田訓子(13)、佐野(15)、川端(16)、黒岩(24)

行程：名古屋駅集合7:00→車にて岐阜県関市高賀神社→高賀の森公園駐車場9:00→岩屋→御坂峠→高賀山山頂12:00(昼食)→御坂峠13:15→高賀の森駐車場14:30→入浴後 解散

梅雨空が続く中、お天気を心配しながら、岐阜の高賀山(1,224m)へ出かけました。地味な山ですが、奈良時代建立の高賀神社から修験道が拓かれて、山岳信仰の対象になった山です。名古屋駅で集合し、車に分乗、東海北陸道を経由し、高賀神社の奥にある公園の駐車場に着きました。今にも降り出しそうな曇り空のなか、ゆっくりと登り始めました。頂上までの高度差は800m、登山道は杉(檜?)木立のなかの、よく手入れされている歩きやすい道です。途中、修験者がお籠りをしたという不動岩屋があり、古い道であることを改めて感じました。ここからは急登が続き、小雨も降り出し、日頃、お散歩程度の運動量の私には難儀な山歩きになりました。あごが出そうな頃に御坂峠に到着。そこからは広い尾根道を歩き、山頂へ。晴れていれば白山から越美国境の能郷白山な



どが見えるはずですが、低い雲が覆っており、展望は周辺の山々だけでした。

昼食も早々に下山開始。御坂峠まで下ると、すぐそばに舗装された林道があるが、どこへ行く道やら? 雨に濡れた急な下り坂は登り以上にしんどく、膝や太ももが悲鳴を上げている。それでも何とか頑張って岩屋まで降りてきました。岩屋の中は10人程度入れそうな不思議な空間でした。その後は駐車場までダラダラ下り、帰り道の公衆浴場で汗を流して解散しました。

田立の滝PW

(報告者 21 期 竹本 彰)

時：2019 年 9 月 13 日(金)

メンバー：L. 竹本(21)、森島(4)、佐野(15)、川端
(16)、高井(竹本の小学校同級生)

行程：地下鉄本郷駅集合 7：00⇒車にて名古屋 I
C⇒中津川 I C⇒田立の滝駐車場 8：30→田立の
滝<天河の滝→不動滝> (昼食) →往路を引き返
し→田立の滝駐車場 14：30→南木曽温泉 (入浴)
⇒地下鉄本郷駅集合解散 17：00

「田立の滝」は岐阜県木曽郡南木曽町を流れる
大滝川 (木曽川の支流) の峡谷にかかる無数の瀑
布の総称です。うるう滝、らせん滝、洗心(せん
しん)滝、霧ヶ滝、天河(てんが)滝、不動滝、そ
うめん滝等があります。日本の滝百選に選ばれて
います。佐野さんに竹本の家に来てもらって、す
ぐ近くの高井の家に寄って、豊田インターから名
古屋インターを経由して、地下鉄東山線本郷駅で
森島さん、川端さんと集合。また、名古屋イン
ターにもどり、中津川インターから国道 19 線を走
り、坂下から田立の滝の駐車場に入りました。帰
りは行きの逆です。天河の滝は素晴らしくて特に
おすすめです。以前は滝の落ち口へ行くことがで
きたのですが、今は入れないようになっていまし
た。誤って落ちたらまず命はないので。最後に不
動滝を右手に見ながら金属製の足場で作った道
をジグザグに上がって、滑になっている所で昼食
をとり、降りてきました。いいハイキングでした。



天河の滝

新年会

時：2019 年 1 月 26 日(土)

メンバー：森島(4)、中野、(8)、白井(9)、窪田
(11)、野村(12)、神林(13)、柴田訓子(13)、
川端(16)、小島(17)、渡邊(17)、安井(22)、
黒岩(24)、廣田(25)、

会場：名古屋駅前 奥志摩名駅中央店 別館



梅 典雅氏(19 期)の講演を聴講

中日文化センターの特別講演会

「白山の高山植物と白山信仰の歴史」

時：2019 年 5 月 31 日(金)

佐野(15)、川端(16)、小島(17)、渡邊(17)が参加

暑気払い

時：2019 年 8 月 31 日(土)

メンバー：森島(4)、中野(8)、白井(9)、窪田(11)、
森川(11)、野村(12)、神林(13)、柴田訓子
(13)、川端(16)、小島(17)、渡邊(17)、
竹本(21)、安井(22)、黒岩(24)、寺本(27)

会場：名古屋駅前 焼肉 牛わか



1. 京都・清滝川Pw

(報告者 11 期 加藤忠好)

・実施日 2018 11/14(水)

・報告

名所の多い京都でも、紅葉の頃というのは何を見にこんなに集まったのかと思われるくらいに人が溢れている。日本語より外国語が多く聞こえるという感すらある。

サンマP2018 実施の山上で、次回の山行きは京都・保津峡あたりを歩くことが決まった。企画は8期伊豫さんだ。

案の定、京都駅JR嵯峨野線ホームは人が溢れていた。しかし、嵯峨・嵐山で人がどっと降りてゆく。京都から奈良線に乗っていても、満員なのは伏見稲荷までである。京都といえども有名観光地は超満員であるが、それ以外はそうでもない。狙いはこれである。

我々が下車した保津峡駅は紅葉のシーズンであるにもかかわらず駅員すらいない。保津峡を眼下に眺め桂川の下流方向に歩く。トロッコ保津峡駅に架かる吊り橋が峡谷に風情を添える。まだ、このあたりは緑である。「あれっ、この道は平坦だったはず・・・」それは若さゆえの錯覚であったようだ。どうやら年齢の増加と共に坂道センサーの感度が鋭敏になるようだ。約30分歩いて休憩。

そこは清滝川が桂川に注ぐ合流点なのだ。足がすくむような岩の上に立てば、保津峡下りの舟がゆっくりと下っていく。大声で呼び、手を振ると、先方も手を振り返す。我々がとんでもない高さにいるので、驚いているようでもある。ここは「科捜研の女」でよく出てくる絶壁、好撮影地なのだ。

桂川から今度は清滝川を遡上する。溪谷の規模は小さくなるが、山水画の中を歩く気分の道だ。栈道とまでは行かないが、谷は瀬となり淵となりいろいろな顔を見せる。

格好の岩があったので休憩。今日は伊豫さんの誕生日なのだ。自分の誕生日に山歩きが企画できるなんて羨ましい。臨時京都在住の金井さんが京都でも有名名店のバースディケーキを買ってきた。早速ローソク、年齢には少し足りない本数だけど、みんな童心に戻り笑い、おいしくいただいた。

清滝の集落に出る前の最後に谷が曲がるあたりから紅葉が盛りになっていた。水があるので、紅葉が一層映えるようだ。



《清滝川にて紅葉鑑賞》

清滝に至り、金鈴橋、渡猿橋という優雅な名前の橋の間、紅葉に囲まれるような河原に下り昼食。伊豫さんや赤地さんの作る温かいみそ汁や卵とじスープを堪能した。

清滝は愛宕山の登山口で紅葉も美しいが、ここまでの谷筋の道はなぜか人がこない場所である。迷い易い場所があるのと、軽山靴ぐらいが必要な道であるからだろうか。

清滝からは林道ぐらいの幅がある道で清滝川を遡る。相変わらず兩岸が迫り、峡谷が続く。この道は周山街道を経て若狭に抜ける道でもある。台風で倒された倒木もあり。ちょっとスリリングな気分も味わえた。沈下橋を越え、美しく手入れされた杉林を過ぎ、清滝発電所の取り入れ口まで来れば神護寺はもうすぐである。金井さんに合わせ伊豫さんは高雄橋で待つという。残り12名は階段を登った。汗ばむほどだ。紅葉は見頃。観光客もほどんど居るが、それほど多くもない。境内の紅葉を愛で、瓦け投げに興じ、待ちくたびれていた2人に合流。滝頂橋、指月橋を過ぎ、槇ノ尾BSからJRバスに乗った。



《神護寺にて紅葉鑑賞》

昼食時、急遽晩飯も京都でということになり金井さんが超人気店「黒猫軒」を予約。突然だったので無理と思われたがOKだったのだ。わ

ら天神BSで下車。時間があつたので桜宮・平野神社見物で時間調整。十月桜が咲いていた。黒猫軒では日本風の出汁と胡椒辛味の京都味のする中華料理を堪能した。

2. 龍野の山と城下散策Pw

(報告者 11期 加藤忠好)

- ・実施日 2018 12/13(木)
- ・報告

城下町というのはその地域の文化の中心地でもある。町が誇る文学者が1人や2人は居るものである。龍野では、まず三木露風が挙げられる。彼の作った童謡にちなみ、町じゅうに「赤とんぼ」があふれている。「赤とんぼ」は知られているが、龍野はあまり知られていない。姫路から中国山地の方に分岐するJR姫新線というローカル線に乗ったその先にあるのでなおさらである。

龍野には、金井さんを除いた全員が定刻前に集合した。小さな城下町は揖保川を挟んだ対岸の山側にある。車の多い道路は避け、用水の点検路のようなマニアックな道、歩行者専用橋で揖保川を渡った。山際であっても、川に近いところは洪水に遭い易い。ここでは、万が一の時には、堤防の上に畳を差し込んで嵩上げする工夫がしてあった。畳を犠牲にして洪水を防ぐ。おもしろい考えだ。橋を渡るとタイムスリップした町並み。一方、龍野醤油で有名な街。レンガ煙突が町並みにちょっと近代的な風情を添えていた。



《龍野城・隅櫓》

大手門から城に入った。おやっと思うほど小さい。昔は山の上に城があったようだが、平和な江戸時代には山を降り陣屋形式の形だけの城で十分であったのだろう。本丸御殿は後ほど見学することにし、山際の猪除けの柵を開けこ

こからいきなり山道に入った。ここは、城から紅葉谷への抜け道なのだ。

紅葉谷は字のとおり紅葉の名所だが、12月も半ばであるので大量の紅葉葉が散ってきた。そのような風情のある道を歩いた。気分はのんびりでも相当急である。



《相撲の祖：野見宿禰の墓にて》

野見宿禰の墓への急階段を登り、墓の上で休憩した。龍野の街が眼下に、さらに姫路あたりまでの大展望が楽しめた。ここからが高三郎を思わせる急登の連続。標高差60mで次の休憩とした。やはり我々は十分に「お年頃」なのだ。次は90mで休憩。稜線に出ると平坦に感じられた。それは比較の問題で、稜線の道でも90m登ったのだからそれまでの道がいかに急だったかわかる。近畿支部初参加の16期井上さんは高三郎のような道がずーっと続くのではないかと不安だったよう。私も下見の時はそう思ったものだ。

山頂近くでは桐が実をつけていた。花札の12月が桐であることが良くわかるような形をしていた。標高394.4mの的場山で昼食とした。暖かいものがうまい。いつものことながら伊豫さんに感謝。

山頂から両見峠へは2ピッチ1時間弱で下山できた。ここも先ほどでもないが、かなり急だった。両見峠からはのんびりとしたほぼ下りの紅葉の道。

午後から参加という金井さんからの携帯が鳴った。すぐ近くの聚遠亭まで来ているらしい。龍野神社を経て聚遠亭の庭で合流。木箱に入った小山ロール持参である。早速、大中小で不公平の平等を楽しんだ。

殿様の居住地であった御涼所は、自分で戸を開けて入って良いとのことだった。さすがに江

戸の秩序が残っている街だ。内部見学したが、意外と狭い生活空間に驚かされた。

再び龍野城に戻り、本丸御殿を見学、昭和の終りに再建されたものらしいが、ここも無料だった。木造建築というのは威厳があってもどこかに職人の手になる温かみを感じる。三木露風の生家も見学した。

打ち上げは姫路駅の明太子食い放題の店、楽しかった一日を振り返った。東海から参加の野村さんは新幹線で帰っていった。

3. 京都・大内山 P w

・実施日 2019 1/31(木) 雨天により中止

4. 京都・大内山再 P w

(報告者 11 期 加藤忠好)

・実施日 2019 2/1 (金)

・報告

たった 1 日延期したのに、苦労なしで 2 月の企画ができてしまった。

この山城は金閣寺、龍安寺、仁和寺という超有名な観光地に接しているが、コース自体についての情報は非常に少ない。いわゆるほぼ誰も来ない京都の山なのである。

集合は 10 時 45 分、府立堂本印象美術館とした。京都市街でも北のほう、ここなら早く着いた人も時間つぶしに事欠かないだろう。それに 65 歳以上は無料なのだ。結果的には 10 時頃にはほぼ全員集合していた。

絵画鑑賞もトイレも済ませ 10:50 頃出発。衣笠山登山口まで約 5 分、急登を約 5 分登った所で服装調整休憩。冬ということもあるがみんな厚着なのだ。私も風邪ひき後の下見の時にバテたところだから、ゆっくりと登る。稜線までの標高差 80m を約 15 分で登りさらに 11 時 15 分には衣笠山の山頂に居た。よく知られた山なのに、測量の都合で三角点はないとしても、山頂の標識すらないのだ。しかし、この山の特典は、金閣が無料で望めることだ。ここからの風景は絶景ではないが、「得」をした感じがうれしい。

衣笠山からは龍安寺の裏山を縦走することになる。頂上から鞍部へ直下の道は、前日の雨で滑りやすいと判断し、少し戻ってトラバース道を歩くことにした。

鞍部に着いて驚いたのは、女性 4 人だけしか居ないのだ。コースを記入した地形図を全員に

配ったのと、たった 7 分しか歩いていないのに・・・。10 分ほどして男 10 名が到着した。どうやら低山なのでなめてかかったようで、女性との間隔が開いたためトラバース道の入口に気づかなかったようだ。低山でもここは秘境と言っていたのにである。



《参陵道：一条・堀川天皇陵》

秘境！！そう、ここは平安時代の宇多、円融、一条、堀川の天皇陵や火葬塚が続く山稜なのだ。登山道でなく参陵道というらしい。

鞍部から南西に回ると、パッと視界が広がった。京都の低山で、こんなに視界の広がる場所は珍しい。山上にあるしっかりとした石組みの建造物は城ではない。江戸末期、尊王思想により江戸幕府によって整備された一条・堀川天皇陵なのだ。ここに立つとその気運の上に明治維新があったことが感じられ面白い。陵の前庭で昼食とした。好展望、眼下に仁和寺・五重の塔や雙ヶ岡も見える。

陵を回るように石畳の道を北に約 5 分登ったピークが円融天皇火葬塚である。火葬塚というのは火葬したと伝えられている場所で、天皇陵は別の場所にある。

ここから、稜線を西に入ると山道になる。少しばかりのアップダウンはあるが、気持ちのよい道である。時々龍安寺の寺領の石標に出くわす。途中、水井山から比叡山が東方に見えた。青い裾野から稜線近づくにつれ真っ白だ。前日は雪だったのか。雪山を近くで見ると、ここは山奥かと錯覚してしまう。

今回の目的地・大内山。が、地形図には記入されていない山だ。面白いことに仁和寺の伽藍の真上に聳える山であるが、仁和寺の寺領でなく龍安寺の寺領であるという。どうやら、室町時代の寺の力関係からそうなったようである。仁和寺から程近い「船屋秋月」に「大内山」なる菓子があつたので、由来を聞くと知らないとい

いう。あとで調べたら、仁和寺の山名が大内山だったのだ。

その大内山が龍安寺に乗っとならされているというのも仁和寺の大きさであろうか。大内山の山頂には山名の標識はないが龍安寺の寺領を示す石標があった。菅原道真を重用した宇多天皇の陵を大内陵と言う。実際訪れたが、宇多天皇陵は大内山裏側の沢の源頭のようなところにあった。火葬されたまま長い間に所在不明であったが、これも江戸末期に火葬塚と伝わる場所を整備したようだ。天皇陵にしては、湿気の多そうな場所、かつ周辺より陵を見下ろせる不思議な場所だった。

陵から一旦原谷に抜ける峠道に出て、ややこしい工場裏のややこしい道から、御室八十八ヶ所巡りの道に出た。八十八ヶ所巡りは、単に石仏が置かれているところが多いが、仁和寺の境内でもあるここは、それぞれに人が入れる大きさのお堂が建っていた。原谷の峠から約 20 m 登った好展望所で大きなアップルパイを持って金井さんが待っていた。大展望を楽しみ、最高峰の成就山を越え、逆巡りで歩き、最後に結願所大窪寺に参った。それから仁和寺に入り境内を巡った。



《仁和寺の境内から大内山をバックに》

今日の打ち上げも「黒猫軒」。藤井さん、高村さん、井上さんが帰るといので、時間的余裕もあるので、仁和寺駅から全員が嵐電に乗りし 3 人を見送った。残り 13 名は等持院駅で下車。等持院、二条天皇陵をチラッと見て「黒猫軒」に定刻 17 時半に着いた。

5. 泉州・雨山 Pw

(報告者 15 期 三宅 毅)

- ・実施日 2019 3/14 (木)
- ・報告

近畿OB会ではあまり行っていない大阪府南部泉南にある雨山(312m)を中心に展望の良い尾根歩きを企画した。雨山は登山にはふさわしくない名前だが雨乞いの山で干天の時は

村人がこぞって参拝し雨乞い踊りを奉納したそう。また南北朝の時代には紀州と泉州を結ぶ粉河街道を抑える軍事要塞として雨山城、土山城があり南朝と北朝の間で争奪戦が繰り広げられたそうである。



《雨山をバックに》

J R 大阪駅から約一時間の日根野駅にて午前 10 時参加者 10 名全員集合。南海バスに乗り換えて 10 分で登山口の土丸バス停到着。ここは泉佐野市である。ここから土丸城跡に向かう。急な丸太の階段を 15 分登ると鉄塔のある広場で展望が開け眼下に関西国際空港が良く見える。ここから岩場の急坂を登る。快晴の早春の日差しはきついが真っ青の空が綺麗で展望も良い。15 分程で土丸城址着。曲輪がはっきりと残っている。西側大阪湾の方が大きく開け関西空港や日根野周辺の貯水池がたくさん見える。淡路島や六甲山は霞んではっきりは見えない。土丸城跡を少し下って登り返すと雨山頂上 312 m で立派な祠と休憩小屋がある。井戸跡、千畳敷跡、月見亭跡などが山城の名残を感じさせる。ここも眺望が良く大阪平野、大阪湾を眺めながら昼食。雨山を後に急な岩稜の登り下りが暫らく続くがアルペン気分満点だ。展望は抜群で南側に大阪和歌山県境の和泉山脈、眼下には最終到達地点の永楽ダム湖が見える。谷を挟んだ向かいの尾根上にこれから行く展望台が小さく見える。

尾根を一旦 100m 下り展望台まで 80m 登り返すのが辛い。皆さんの顔に嬉しくない表情が出ている。何とか展望台まで登り返し記念撮影。360 度の展望を楽しんだ後は一気に 150m 下ると永楽ダムに到着。振り返ると展望台が遥か高くと見える。歩行時間約 4 時間、最高標高 312 m だがアップダウンが多くてなかなか歩き応えのあった PW でした。

最後に参加した皆さんからのメールの一部を紹介します。雨山 PW の雰囲気良く出ていると思います。



《岩稜を歩く》

『昨日は三宅晴れ。久しぶりに岩稜混じりのアルペン歩きができ満足しています。地形図では、三宅さん特有の二度返しのアップダウンを予想していましたが、小さなコブも結構多く、推定登山標高よりもうんと多く歩きました。そのせいでしょうか、脚の筋肉が結構張っています。日頃ぐうたらをしているので、この運動は良かったのかも。山歩きは良いですね。それに、好展望の山、春の霞がありましたので我が家は確認できませんでしたが（当然か？）、淡路島がうっすりなど、そこそこ見えていました。眼下には中世から変わらず見える田園風景、城を守る兵士の如くに眺め居りました。急な上下移動で汗もかきましたが、水分もさほどいりでもなく、やはり、早春の山ですね。

さほど有名でもなく貸し切り状態で歩けた山、それでいて楽しめた山、三宅さんの慧眼に感心するとともに感謝感謝です。』

『泉州・雨山PWは見事な晴れ日。雨山を通称、晴山と呼んでも良い程。最高峰が 314m とのことです。ストック無しで歩いたのですが、アップダウンが想定外にきつく、山は高さだけではないと再認識。周りによく似た山々があり、興味が引かれる地区ですね。』

『レアコースの一日ありがとうございました。電車で大阪湾を周って日根野方面に行くというのは滅多にないことなので、距離以上に遠出した気分になって満足でした。登り下りはあったものの、ワンピッチ未満の行程だったのでそれ程足に来ることもなく、今日の階段の上下も支障なしです。ただ、片方の踵が痛く、最近長歩きするとなるので、足の肉厚が減ってるのかもしれないですね。写真は整理後お送りします。ではでは』

『この山行きはお天気の良さと眺めの良さと、最後に思いがけないハプニングがあったりして最高でした。良き思いをさせてくださった

三宅さんや同行の皆さんに本当に感謝です。

（中略）展望台で皆さんと別れ、「成合口」のバス停まで一人 52 歳の身体を駆使して（笑）30 分ほど（3 時 35 分）でつきました。4 時 17 分のバスまでかなり時間があるので日根野の駅まで歩こうと思いバス停の前で耕耘機を使っていたおじさんに路を尋ねたら「日根野」より「熊取へ送って行ってあげる」と耕耘機をそのままに軽トラに乗せてくれました。且つ途中自分の家に立ち寄り（3 階建ての無茶でっかい建物）おっきなミカンとお茶をいただき、きっちり時間を合わせて熊取駅 4 時 24 分発「関空環状線外回り急行」に乗れました。おかげさまで、余裕をもって日本語教室に間に合いました。』

6. 金勝アルプス・天狗岩 P w

・実施日 2019 4/25(木)雨天により中止

7. 金勝アルプス・天狗岩再 P w

（報告者 15 期 宇野 潔）

・実施日 2019 5/8(水)

・報告

10 年ぶり 2 回目の金勝（こんぜ）アルプスです。金勝山（鶏冠山、龍王山）一帯を近江湖南アルプスと呼んでいます。山は風化花崗岩地帯で、突き出た天狗岩や耳岩からの眺望が楽しめます。また、平安時代に作られた狛犬摩崖仏や逆さ地藏などの史跡もあり楽しいコースです。



《旧狛犬寺の磨崖仏》

前回は金勝寺（こんしょうじ）林道を馬頭観音までタクシーで行き、ほとんどの高さを稼ぎましたが、今回は上桐生のバス停からの周回コースとし、標高差 430m でした。

雨のため順延して快晴の PW となりました。バス停から、養蜂場のそばを通り、沢筋を落ケ

滝に立ち寄り稜線を目指します。

ところどころ、渡渉しながら進みます。途中からは、花崗岩の岩肌をロープで登る所もあり、明るい沢筋の登りは楽しいものでした。でも、雨上がりなどは歩けそうなルートでは有りません、実施日を延期してよかったと、一人で納得していました。岩の登りは高度が稼げます。鶏冠山と白石峰（本日最高峰）との稜線の鞍部に出て一休みです。少し進むと見晴らしの良い稜線となり、天狗岩の雄姿？が目の前に現れました。風化花崗岩独特の岩の稜線をまずは天狗岩を目指します。



《天狗岩上で》

天狗岩は眺望もよく一番人気の場所です。アルミの梯子も設置してあり 360 度の展望が楽しめました。ここで昼食を予定していましたが、陽射しが強く暑すぎました。ということで人が多くても狭い木陰で食べました。お茶会は耳岩の秘密の岩テラス（前回使用）で行いました。案の定、秘密の岩テラスには先客はいませんが、見晴らしはいいものの、滑り落ちれば・・・と不安の声もあり結局、自己責任組と慎重組とお茶会は2か所に分かれて開催しました。

天気は快晴で、見晴らしも良く気持ちの良い稜線を、岩の間を縫って白石峰まで登りました。本日の最高峰！白石峰です。実は、今回は、登頂は有りません。ピークハンターはしない計画でした。はい、ここで記念撮影！平成最後のPW予定が雨天延期により、令和第1回目の記念すべきPWになりました。

下りは、国見岩を經由し、狛坂寺跡にある狛坂摩崖仏を見学。平安期（奈良説もある）に彫られたもので高さ約 6m、幅約 4mとの事で、見上げる大きさでした。のんびりと春の日差しを受けて、逆さ地蔵（オランダ堰堤の石を取るための工事で、転げた）やオランダ堰堤（明治

時代にオランダ人技師に造られ 110 年が経過）を經由して、無事出発地の上桐生バス亭に到着しました。

天気の良い春の1日、変化にとんだ楽しいコースを堪能しました。

後は、南草津のスーパー銭湯「極楽湯」で汗を流しました。

8. 清和源氏ゆかりの地巡り Pw

（報告者 5期 金岩 孜）

・実施日 2019 6/3（月）

・報告

6月のPWは梅雨入りの心配もあったが、多少の雨でも決行できるコースということで、阪急宝塚線山本駅から最明寺滝に立寄り満願寺を経て多田神社に参拝して多田駅まで歩くコースで設定された。

参加人数は8名に留まったが、晴男のM氏の念力によって好天、それも初夏の爽やかな暑さを伴った青空の下でのウォーキングになった。

実施当日、集合地の阪急宝塚線山本駅から5分程の「あいあいパーク」（英国の地方都市サリーの17世紀頃の佇まいを再現して造られた宝塚園芸振興センター）に全員が集合時刻までに揃ったので当日の行動予定等を説明し足取り軽く出発（10:13）。



《集合地、あいあいパーク》

まずは駅前の「木接太夫彰徳碑」に立ち寄った。山本地区の園芸は平安時代から千年の伝統があり、接木という園芸史上画期的な技術が開発され、秀吉から「木接太夫」の称号が与えられた。それを顕彰する碑が前述の「木接太夫彰徳碑」。以前はこの山本辺りは園芸関連業者が軒を連ねていたが、今は住宅街に様変わりしている。ウォーミングアップ歩きを終え、本格的な歩きに移り、最明寺滝へと向かった。舗装道路歩きで汗ばみそうになった頃、木陰の続く土道に変わり元気を戻して更に進む。

心霊スポット寺院の宝教寺を横目に「大聖不

動尊」標示の山門をくぐり抜け、最明寺滝への谷川添い山道を足元に注意しながら進むと、目的の滝に着いた（10:50）。

不動明王像なども祀られていて修行場の雰囲気であり、祭事準備中なのか数名の若者が忙しそうに動き回っていた。



《最明寺滝》

山門手前の分岐点まで戻り、今度は切畑川堰堤階段を上って満願寺へと向かった。

緩い上り道を進み中山連山への分岐を過ぎると間もなく「井植（イウエ）山荘」の正門が目に入ってきた（11:13）。内部には人気がないが、調べてみると近年毎月第一日曜日に公開されていることが分かった。興味深い山荘である。この山荘の裏に隣接して「大聖不動明王」があり、不動明王像が祀られていた。そして入口脇の石柱に印されていた奉納者名から山荘と深い関係のあることが伺えた（11:40）。

ようやく満願寺近しである。が、空腹感も増し先導者は足早になってきた。

丁度昼に満願寺に到着（12:05）。金剛力士像の迎えを受け仁王門を通る。全員揃ったところで、先ず昼食。それから境内をウロウロ。

金堂、毘沙門堂、源家七塔、不動明王像、坂田金時の墓、四国八十八箇所巡り第1番地藏、二人塚や太子像と九重石塔などを。清和源氏ゆかりの祈願所らしさが感じられた（～13:15）。

満願寺墓地と愛宕原ゴルフ場の間隙道を道標に従って多田神社に向う。舗装道路に照り返す熱気で汗ばみ出した頃、ゴルフ場脇から外れ歩行者専用の下り山道になり、木陰も多く助かった。が、10数分で湯山台の住宅街に。みんな黙々歩くのみ。

下見のお陰で迷うことなく、目的地地藏尊に行着き住宅街を後にすることが出来た。残の行程の目処が立った。10数分行くと、案内マップ

にも載っていた「西多田皇太神宮」があり、参拝した。立派な農家集落のはずれに、社がひっそり佇んでいた。お世話する人の高齢化に因るのだろうか。

車が行き交う道路の高架橋を渡って住宅街を抜けると遠くに多田神社の大鳥居が見えてきた。赤い御代橋を渡り、最後の元気を絞って階段31段を上り多田神社に着いた。

休憩所が目に入り、先ずは休憩。大中小と三ツ矢サイダー付きで。

多田神社は、天禄元年（970年）、源満仲がその前身の多田院を建立。今の建物は、徳川4代将軍家綱によって再興され、源満仲、頼光、頼信、頼義、義家の五公が祀られている。神社一帯は神聖な雰囲気に包まれて国の史跡に指定されおり、本殿や拝殿を始め国・県の指定を受けている文化財が多数ある。南大門に立っていた金剛力士像は明治の神仏分離令で多田神社になった際、満願寺に移されてしまった。また、指定外ながら64代横綱曙と65代横綱貴乃花による奉納手数入記念植樹の2石柱も建てられていた。



《多田神社・拝殿》

東門から退出（15:30）、打上げ会場である多田駅前の「餃子の王将」へ向かった。店内は夕刻のラッシュ前で、我々は伸び伸びと放談、大いに盛り上がったのだった。（自宅から計19,700歩）

実施に当たって、事務局を始め参加各位による絶大なご協力に篤くお礼申し上げたい。どうもありがとう！

近畿支部の活動まとめ（サンマP2018以降）

2018 11/14(水)	京都・清滝川Pw（企画 伊豫）参加者14名
金岩⑤、篠島⑧、伊豫欣⑧、高水間⑧、伊豫敦⑩、藤井⑩、加藤忠⑪、加藤智⑪、 畔山宏⑪、赤地賢⑫、楠屋⑭、宇野あ⑮、金井⑮、高村⑮	
JR保津峡駅～保津峡～落合橋～清滝～高雄・神護寺～槇ノ尾BS	
2018 12/13(木)	龍野の山と城下散策Pw（企画 加藤）参加者13名
金岩⑤、伊豫欣⑧、篠島⑧、伊豫敦⑩、加藤忠⑪、加藤智⑪、畔山宏⑪、野村⑫、 宇野あ⑮、金井⑮、三宅⑮、鈴木⑮、井上⑮	
JR本龍野駅～龍野城～紅葉谷～野見宿禰神社～的場山～両見峠～紅葉谷～ 龍野神社～聚遠亭～龍野城～三木露風生家～JR本龍野駅	
2019 1/31(木)	京都・大内山Pw（企画 加藤）雨天中止
2019 2/ 1(金)	京都・大内山再Pw（企画 加藤）参加者16名
金岩⑤、伊豫欣⑧、藤井⑩、加藤⑪、加藤智⑪、畔山宏⑪、野村⑫、赤地賢⑫、 赤地喜⑭、三宅⑮、金井⑮、間所新⑮、間所美⑮、宇野潔⑮、高村⑮、井上⑮	
堂本印象美術館～衣笠山～一条・堀川天皇陵～円融天皇火葬塚～（参陵道）～大内山～ 宇多天皇陵～原谷峠～成就山～霊山寺～大窪寺～仁和寺～嵐電・仁和寺駅	
2019 3/14(木)	泉州・雨山Pw（企画 三宅）参加者10名
金岩⑤、篠島⑧、藤井⑩、加藤忠⑪、加藤智⑪、畔山宏⑪、赤地賢⑫、鈴木⑮、 三宅⑮、宇野潔⑮	
JR日根野駅＝土丸BS～登山口～土丸城跡～雨山城址（山頂）～小屋谷頂上～ 永楽池～奥ノ池～＜東コース＞～展望台～永楽ダム～浪商学園前BS＝JR熊取駅	
2019 4/25(木)	金勝アルプス・天狗岩Pw（企画 宇野）雨天中止
2019 5/ 8(水)	金勝アルプス・天狗岩再Pw（企画 宇野）参加者13名
金岩⑤、伊豫欣⑧、伊豫敦⑩、畔山宏⑪、加藤忠⑪、加藤智⑪、楠屋⑭、三宅⑮、 高村⑮、宇野潔⑮、間所新⑮、間所美⑮、井上⑮	
上桐生BS～落ヶ滝～鶏冠山分岐～天狗岩～耳岩～白石峰～国見岩～狛坂摩崖仏～ 出合～逆さ観音～オランダ堰堤～上桐生BS	
2019 6/3(月)	清和源氏ゆかりの地巡りPw（企画 金岩）参加者8名
金岩⑤、伊豫欣⑧、伊豫敦⑩、畔山宏⑪、加藤忠⑪、楠屋⑭、三宅⑮、井上⑮	
	
《京都・大内山頂上で『山』『内』『大』の人文字で遊ぶ》	

第22回 野沢温泉スキー合宿2019

11期 青柳 健二

・実施日 2019年2月15日(金)～17日(日)

・参加者 (4期)佐藤 (8期)野村 (9期)谷道
山中 (11期)青柳・井上 (12期)宮島
(13期)山西 (15期)上馬 (22期)黒崎 10名

今年のスキー合宿は、久しぶりに好天に恵まれ野沢で滑る楽しさを思う存分味わうことが出来ました。私個人の行動を中心に、その概況を報告させていただきます。

金沢・富山では雪の少ない冬だったようですが、野沢温泉のゲレンデは雪がタップリ、最高のコンディションでスキー合宿を迎えました。

参加者は10名、谷道さんが働き先の八方尾根から久しぶりに参加、昨年は荒天で殆ど滑れなかった黒崎さんがリベンジ参加、そして山中さんが1年振りに復活し、旦那さんが海外出張で山西さんが1人参加、スキーと野沢が大好きな常連組を加えて男子9名・女子1名での開催です。

15日(金)は朝から晴れ無風、気持ちの良いスキー日和でした。

早朝新幹線に入った黒崎さん、上田の宮島さん、白馬から入った谷道さんは午前中から滑り込み、佐藤さん・野村さん・上馬さんの金沢組も3日券を買って一滑り。関東から新幹線に入った山中さんと私は、飯山駅で井上さん・山西さんに迎えられ、11時に宿に入り、12時前には Gondola 上のレストハウスに向かいました。

やまびこレストハウスは、既に外人さんたちで満員でしたが何とか席を確保、すぐ全員が集合してスキー合宿のスタートです。今年のレストハウス、一番人気は「120g オージービーフのガーリックステーキランチ」眼の前でステーキを焼いてくれます。谷道さんは、これを大盛でペロリ。野村さんは3日間食べ続けたのです。私は、焼鳥丼を食べましたが、これも美味しかったですね。

午後からは、皆でやまびこゲレンデを滑りました。1650m毛無山山頂からは絶景が広がります。

記念写真を撮って、皆思い思いにやまびこAコースを滑ります。既にコースにはコブが出ていましたが、雪は柔らかく、快適に滑ることができました。黒崎さんは、この日の為にスキートレーニングを積んできたそうで、安定感ある滑りを見せていました。富山のたいらスキー場の急斜面で滑り込んでいる井上さん、膝がしっかり入った小回りで、このゲレンデで撮ったポスターのモデルのような滑り(ちょっと褒め過ぎか)でその上達ぶりに感心させられました。井上さんと谷道さんは、今やゲレンデより滑る人が多いリフト下の自己責任エリアを滑って悦に入っていました。

ひとしきり滑ると汗がタップリ。コース下の「喫茶ダンテ」に入ります。りんごソフトクリームを食べる。その冷たさと甘さが疲れを癒します。こんな時間が大好きなのだ。この場所に休憩所があるのが嬉しいです。

再度リフトを登ると、同じゲレンデで滑りながらすれ違いとなっていた佐藤さん達金沢3人組と合流。また記念写真を撮って、また少し滑って下山のモードに入る。私は、スカイライン連絡リフト横の小ゲレンデでカービング小回りの調整を少しして、スカイラインコースを滑り終えスキーを終えました。宿に帰ると4時を越えていた。半日だけだが、好天の中大満足のスキーであった。



(毛無山山頂 2019.2.15)

部屋は、「朝霧・夕霧」に、女性部屋の「さくら」と男2人用に「ひばり」を確保。何時ものように、朝霧・夕霧で、持ち寄ったお菓子とワイン・焼酎を開けて歓談する。お風呂は内風呂で済ます。疲れて中尾の湯に行く元気が出ない。私は、今回

の野沢では外風呂に入らず終わってしまった。最後の日の朝、佐藤さん・井上さんの二人が雪の降る中を中尾の湯に出掛けたのだが。

18時から夕食。この日は、我々10名と夫婦一組だけの食堂でした。信州名物の馬肉の他、工夫をこらしたメニューが並ぶ。全員が生ビールを注文して乾杯。すきっ腹にビールが染み入り、美味しい料理が疲れを取るエネルギーとなる。山西さんが、右手の中指根本に絆創膏を張っている。やまびこAコースで転倒して強く打ったとのこと。少し腫れていて痛みもあるとかで、やや気分が落ち込んでいる。それだからか、お酒の好きな彼女はビールをしっかりと飲んでいました。

一泊だけの人がいるので、宿のロビーで記念写真を撮る。7時45分ごろから、恒例の夜の宴だ。明日帰る、黒崎さんと谷道さんに話をしてもらう。黒崎さんの“観音坂いちえ”は、ひがし茶屋街の近くにある古民家カフェである。築100年の家を改築し自宅兼カフェとして営業しており、新幹線開業後いまだ観光客が多く来る場所であり、土日は休めないのだとのこと。今では芸子さん達とも友達になり、店にも良く来てくれるとのこと。それじゃしょうがない。朝の7時に宿を出て、新幹線で帰れば9時過ぎには金沢に着くのである。私も、大学での最初の下宿が、西の廊の元茶屋だったのだと・・・話が飛ぶ。茶屋を止めて空いた部屋を下宿として使ったのだ。夜になると微かに三味線の音が聴こえた。

谷道さんは、八方尾根でリフト管理の仕事をされている。今年で2年目。去年は山の上のリフトだったが、今年は風と雪が少ない下のリフトに変えて貰えたので続けているとのこと。5月から夏の間は、立山のホテルで働いているのだから、自然の中で生きることがとことん好きなのですね。最近、電源が切れてリフトがストップしたトラブルがあった・・・とのこと。リフトが30分超止まったのだ。何時回復するかわからずジリジリしたが、アルバイトの管理者には手が出せない。回復見込みがない時は、リフトから人を降ろす作業が必要であり、その訓練もしてはいたが、そうなる前に回復したのでホッとした・・・との事でした。まあ、余り無理はせず続けて下さい。

佐藤さんが、去年の11月1日に白山に単独行で登った時の写真を披露してくれました。

たまたま、前日に雪が降り、当日は見事な青空。素晴らしい雪景色を眺めながら頂上に立った、その時の写真でした。佐藤さんは、134回も白山の頂に立っているのですが、それだけ登れば白山の神様から素晴らしい贈り物が貰えるのでしょうか。その写真は佐藤さんのブログで観られますので、皆さんもご覧になって下さい。

さらに、佐藤名誉教授に昨年9月に発刊された教科書「人間工学の基礎」の話をして頂きました。本の目次を示し、大惨事となった航空機事故・列車事故で明らかとなったヒューマンエラーの事例をあげながら人間工学の考え方・役割を説明して頂きました。喜寿を越えてなお、フルマラソンを走り、スキーを続けられる佐藤さんの生き様が、正に人間工学の集大成とも思われ、リクエストをしたのですが、この教科書が生かされ・活用されることを願うものです。

いつの間にか10時を越えており、夜の宴はこれでお開きにして就寝となりました。



(全員集合 2019. 2. 15)

16日(土) この日は、朝から雪。

朝7時に、黒崎さんは金沢に帰って行きました。山西さんは、昨日怪我をした左手の痛みがひかず、スキーを中止して帰宅することになりました。谷道さんが、長野駅まで車で送っていくことになりました。宮島さんは、今日はお休みを宣言。7時半から朝食。具材タツプリの朝ごはんを食べ、りんごジュースを飲みエネルギーを注入しました。9時過ぎに、車で帰る谷道さん・山西さんと

「又来年！」と別れて、6人でスキーに出発しました。

長坂ゴンドラを登ると外は真っ白なガス、上は殆ど視界が効きません。この日は、湯の峰・水無ゲレンデで滑ることにします。湯の峰ゲレンデに着くと、雪は静かに降るも視界はまずまず、この日は、終日このエリアで滑ることになりました。薄く雪が積もったゲレンデは、コブも無く滑り易い。ブナとダケカンバの森の中の小さなゲレンデだが、雪が樹々に積もり幻想的な雰囲気。何より、スキーヤーが少なく穴場的なゲレンデなのです。自分のスキー術を確認し、調整・練習をするのには最適です。ただ、欠点は昔あった小屋がなくなって、休憩トイレ場がないこと、チョット辛い。斜面が緩やかな湯の峰ゲレンデを滑り、調子が出てきたところで上・中級者用の水無ゲレンデを滑る。短いリフトだが、人を変えて二人で色々話をするのが楽しい。

11時過ぎに早めに昼食を取ろうと中間駅から、ゴンドラに乗りレストハウスに入りました。

6人なので上の平には降りずに、レストハウスやまびこで昼食をとる。この日は、醤油ラーメン。受験休み・春休みになり若い学生達が多い。12時近くになると混みだしてくるので、席を立ちスキーに出ることに。疲れが溜まった山中さんは、下に降りるとのこと。さてスカイラインを降りたのか？

やまびこ方面は未だ視界が効かないので、5人でまた湯の峰・水無ゲレンデで滑ることにする。ひとしきり滑って、中間駅から上に登って休憩。一階のカフェでコーヒーを飲む。2時過ぎに、佐藤さん達金沢3人組は、スカイラインで降りることに。私と井上さんは、やまびこ4リフトで上に登ってみた。上は、やはり視界が効かない。山頂には登らず、やまびこDコースを滑って、リフトで登り返し、やまびこEコースからスカイラインコースに入って、この日のスキーを終えた。

宿に着くと3時を過ぎたところ、特製の甘酒をいただいて、疲れを癒したのでした。この日はスキーを休んだ宮島さんは、スパリーナに出かけてサウナで体を癒したと聞く。

この日の夕食は、子連れの家族が入って賑やかであった。我々は3人が帰って7人、チョット寂しい。鯉のコブ締め刺身の他、賑やかな食卓であった。飲ん兵衛がいないので、日本酒を飲む者がいない。私は、生ビール一杯で充分であった。隣の席で、ハッピーバースデーの歌が響いた。

夜の宴は、7人では宴とはならない。私が持ってきたDVD「自然で楽なスキーのすすめ」を試聴した。このDVDは、重力とスキーの性能を活かして、力まず楽なスキーをするように勧めている。筋力の衰えた高齢者には適した滑り方だ。私の課題である小回り、井上さんの課題である大回りの展開を観て、明日のスキーの参考にしてもらった。

テレビに戻すと「外国人が好きな温泉地ベスト10」という番組をやっていた。今や外国人天国である野沢温泉が何位に入るのか、皆で観る。指宿や草津、箱根などが出てくるが、野沢温泉は出てこない。結局一位は秋田の乳頭温泉であった。雪景色と乳白色の温泉が好かれているようだ。20位以内には入っていたようだが残念なり。

番組が終わると9時であった。皆、疲れが出たのか布団を引き出す。このまま、就寝となる。

17日(日) 朝起きると雪が降っていた。予報は、雪のち晴れとある。

会計を済ませて、朝食をとる。山中さんは、もうタツプリ滑ったからと、この日は滑らず先に帰るとのこと。昨日休んだ宮島さんを入れて、今日は6人で滑ることになる。9時過ぎに、山中さんに送られてスキーに出る頃には、私の期待したとおり雪が止み日差しが出ていた。

日曜日であり、ゴンドラ乗車の列が建物を一周していたが、速やかに進みゴンドラ上に出る。やまびこゲレンデへ向かう斜面は、人が一杯だ！これを見て、午前中は湯の峰・水無ゲレンデで滑ることにする。湯の峰ゲレンデでは、シュプールを描く新雪の滑降を期待したが、既に滑られていて、10cm弱の新雪の中に沢山のシュプールが書かれている状態。却って滑りづらい。水無ゲレンデは、より多くの方が滑ったためか圧雪状態となっていて滑り易い。主に此方で滑ることにする。新雪を被ったブナの樹が綺麗だ。昨日観た

DVDのイメージを頭に入れて滑る。
コースの隅の新雪が残るエリアに入るなどして、
色んな滑りを楽しむ。愉悦の時だ。

昨日同様、早めに昼食を取ろうと 11 時過ぎには、ゴンドラに乗りレストハウスに入った。
上手く席を確保して昼食。今日は、野菜カレー。
これも美味かった。この日は子供づれが多く賑やかだった。やはり、子供たちにもっとスキーを楽しんで欲しいと思う。

12 時頃にはレストハウスを出る。佐藤さん達は、スカイライン連絡リフト横のゲレンデを少し滑ってスカイラインを降りるという。膝に痛みが出ているという宮島さんも、降りるという。私と井上さんは、残ってやまびこゲレンデを滑ることに。また来年に会いましょうと、別れた。



(スカイラインコースにて 2019. 2. 17)

すっかり晴れて、霧氷がキラキラ輝いている。昼食の時間帯で、リフト待ちはそんなに無かった。毛無山山頂では、またまた絶景が待っていた。人が少ないやまびこAコースを気持ち良く滑った。この日のリフト下は、ボーダーが多い。ボーダーが滑るコースはU字バーンとなっている。

井上さんが、自己責任エリアを滑りたい様子。久しぶりに私もその気分となった。井上さんには、リフト下でなく出来るだけ林間を滑るように指示すると、上手くコース取りをしてブナ林の中を滑っていく。私も、後に続いた。昼過ぎであり、林間も既に多くの人が滑っているので、全くの新雪状態ではなく、人の滑った後をトレースすることにはなるが、それでも結構面白く、林間を滑り降りることが出来た。汗もタップリかいたので、

また「喫茶ダンケ」で休憩。山ぶどうジュースで喉を潤した。晴れの日の至福の時間を楽しんだ。

1 時半過ぎに、ダンケを出た。井上さんは、まだ林間を滑りたい雰囲気。今度は、下のやまびこ4リフトの横のブナ林の中に入った。井上さんは、すっかり林間滑降に魅了されたようだ。上手くコース取りしてどんどん降りていく。脚に疲れが溜まってきた私は、制動が上手く効かず雪の塊に入り込み大転倒、冷汗をかいたのでした。慣れないことはするものではありません。

やまびこEコースを滑り、連絡リフトを登ってスカイラインの上に出る。さあ、野沢の最終滑降と、少し気合を入れなおし、スカイラインコースを滑り降り、今年の野沢スキーを終えたのでした。宿に戻ると3時を越えたところ。まずは怪我をせず、無事に滑り終えたことが嬉しかった。

以上、野沢温泉スキー合宿 2019 を総括してみました。

今年のスキー合宿は、参加者が10名でしたが、天候に恵まれ楽しいスキー合宿となりました。ただ、初日に怪我をして一日滑っただけで帰られた山西さんは残念でした。怪我の治療には1ヶ月以上かかったようですが、今は全快し医師の仕事にも復帰しているようです。また来年は頼れる旦那さん共々ご参加下さい。

私も今年は6度目の年男、でも喜寿を越える先輩もあり、殆ど一緒に滑った井上さんも私より年長、まだまだスキーを続けたい。いまだスキーに興じることが出来るのは、このスキー合宿ありきなのだ。加齢もあり最近太り気味なのが悩ましいのだが、何とかスキーが出来る体を確保したいと思っている。涼しくなったところで、スキートレーニングを始めよう。

この夏は、長雨の後には猛暑に見舞われ殆ど外に出られず、嵌まっている葉室麟の歴史時代小説を読んで過ごした。お勧めは、“いのちなりけり” “花や散るらん” “影ぞ恋しき” の3部作。作中の和歌『春ごとに 花のさかりはありなめど あい見むことは いのちなりけり』を記して本文を終りとしたい。

2019 年小屋作業

22 期 黒崎 敏男

【日程】

①2019 年春 5 月 11 日（土）～12 日（日）

②2019 年秋 9 月 28 日（土）～29 日（日）

【参加者】

■OB（のべ 15 名）

（13 期）大島良治（春）、柴田茂樹（春）、
柴田訓子（春）、辰野隆義（春、秋）

（15 期）奥名正啓（秋）、上馬康生（秋）

（16 期）中野淳一（春）、北川隆次（春、秋）

（19 期）梅 典雅（春）

（20 期）久富象二（春、秋）

（22 期）黒崎敏男（春、秋）

■現役（3 名）

（62 期）吉田優輝（春）

（63 期）楠大生（春）

（64 期）児玉大和（秋）



春の参加者（撮影 柴田セルフ）

【1】険しいアプローチ

春については、例年どおり山本さんのご厚意でボートを利用でき、また、難所の「へつり」についても補修がなされていたので特に困難はありませんでした。

ところが、秋作業の時点ではつり橋手前のがけの歩行にかなり注意する部分があったうえ、「へつり」も相当のバランス感覚が要求されるようなアスレチック遊具さながらの状態でした。

しかも秋の下見時には河原には道はなく、すすきのブッシュを漕いで「へつり」から 30 分かけて小屋に到着するという有様でした。これまで河原に小屋掛けをして過ごされていた方々がほとんど来られなくなったためと思われます。

秋の場合はダムから小屋まで最低 2 時間半かかるため、とにかく歩行だけでかなり疲労します。

【2】ニセアカシアの伐採

懸案だった小屋に倒れ掛かる可能性のあった枯れた大木の伐採ですが、春の作業でチェーンソーを使い伐採してロープをかけて倒そうとしたものの、上部で他の樹の枝に絡まっていたため完全に倒し切れませんでした。小屋に倒れ掛かる恐れはなくなったのでひとまず安心ではあります。



伐採の様子（撮影 中野）

【3】小屋周辺の整備

う回路のアプローチは春に梅さんが手入れし、秋にも草刈りを行って維持されています。「へつり」部分がいつ歩行不能になるかわからないため、この作業は毎回続けることになりそうです。

また、大島さんがホースの破損修理と小屋前の坂道の木段、ベンチなどを工作され、より快適に過ごせるようになりました。

毎回ホースの詰まりが起こるものの、たまっただろを排出すれば水量は確保できており、水洗トイレもこれまでどおりしっかり使えます。

【4】小屋内部の整備

床板の張替え、棚の修理といった維持に必須の作業は辰野さんと北川さんが中心となって今回も担当されました。これまでの継続的な作業によって建物としての機能は損なわれておらず、当分の間の使用に支障はないものと思われます。

これまでどおり炉も使え、周囲の壁が高温になるため水をかけながら冷やす手間はありますが、趣があって楽しいものです。夜の暗い中で、火を前にすると気持ちが落ち着くのは人間の原始的な本能でしょうか。

コンクリート壁の一部の穴の修復には相当の労力が必要なため、次回での対応となりました。

【5】高三郎登頂

春はコンディションが良かったので、柴田さん、中野さん、黒崎及び吉田君、楠君の両現役生の5名で登山を行いました。

朝4時30分薄暗い中を出発し、以後順調に歩を進め、約4時間のコースタイムで手前側のピークに到達しました。

栃倉分岐まではまったく問題なく、分岐から先は笹が復活してきたため若干歩きづらい面はあったものの全般的には問題なく、最後はいつもどおり雪の斜面をキックしながら到達しました。新道旧道合流地点から上には登山道の上に横倒しになった枝があり、一部はのこぎりで伐採したものの歩行には大きな支障はありませんでした。

今回は特に柴田、中野の両先輩が無事に山頂に立たれ、約50年ぶりとのことだったため、大層感激していらっしゃいました。お二人とも日頃から鍛錬されているたまもので、同行したこちらも嬉しい気分になりました。

当日の天候などもある上、誰にでもお勧めできるようなコースではないのですが、もし、最後に青春の思い出「高三郎」のピークを踏みたいとのお気持ちのある方があれば次回以降お申しつけください。ペースメーカー役を承ります。

筆者自身は登りきった段階で両足がけいれんし、あとはだましまし下山するような始末だったうえ、下山中にトランシーバーを落とし、雪溪の下まで落下してしまったため回収を断念するという体たらくでした。

とにかく、この山についてはただの一度たりとも楽だと思った記憶はなく、今回も一筋縄ではいかないという思いを強くした次第でした。



高三郎ピーク（撮影 柴田セルフ）

秋については児玉君と黒崎が登山しましたが悪天のため1000m付近で引き返し、上馬さんは分岐手前までの草刈り作業に当たりました。

【6】今後の展望

栃倉分岐過ぎの1000m周辺の尾根がやや平坦になっている部分は笹などが復活しているため、再度草刈りを行うのが望ましい状況ですが、小屋からの日帰り作業でできるかどうか、要検討です。

そもそも、常に草木の刈り払いをしないかぎり登山道は維持できないわけで、いったいいつまでそれを行えるのか、将来の見通しがつきませんので、できるまでやってみてとしか言いようのない現状です。

また、小屋作業ももう少し補修を行うことで一段落させ、今後は特に何か作業するでもなく、おのおの時間を過ごしてもらえそうな楽しみ方、つまり「小屋酒場」として集って頂くようにできればとの思いもあります。

登山の部分でも述べましたが、我々だけでなくこれまで周辺で活動されてきた方々の状況を見るにつけ、そろそろこの山域での活動も限界に近くなっているようにも感じますので、自分たちが何とか活動を維持しているうちに、元気なOBOGの皆様にはせめて小屋の姿を見て頂ければ、携わっている者としては嬉しい限りです。

様々な制約がある中ですが、いつか再びこの山域が脚光を浴びる時が来ると信じ、できることは限られますが活動して行きたいと思います。



秋の参加者（撮影 黒崎）

（追伸）

今年春に参加頂いた楠大生さん（2年生：63期）が現在、部長（主将）の任についておられます。

50 年後の卒業旅行

9 期の仲間

確か一年くらい前の千葉組の飲み会だったと思うが、誰からともなく「卒業後 50 年の集まりをやりたいなあ。できれば、東海地方で開いてほしい。」という話が出た。

千葉組の世話役の伊藤俊成（以下敬称略）から東海地方に住む仲間に連絡してもらったところとんとん拍子に話が進み、同期の仲間に 50 年後の卒業旅行の案内が届いた。

参加したのは、幹事の白井勇と保田敦、そして千葉組（伊藤俊成、伊藤博道、清水一、鍋島武、吉田洋次郎）と準組員の山中重夫の 8 名である。

令和元年 10 月中旬のある日、JR 名古屋駅に集合し、関西線で三重県四日市市に向かった。

途中、木曽川の鉄橋を渡り、三重県に入ったころ鍋島が「実は俺、三重県は初めてなんだ」と。欧米を股に掛けて仕事をしてきた男が、足元に空白箇所があることをぼつりと告白した。

約 30 分で四日市駅に到着し、迎えるバスで御在所岳ロープウェイ湯の山温泉駅へ到着した。いざ、御在所岳に登ろうと思って意気込んでいたら幹事の白井がロープウェイの前売り券を配布してくれた。誰一人拒否もせず素直に受け取りロープウェイに乗り込んだ。

約 15 分で高低差 780m の山上公園駅に到着した。そこで観光リフトに乗り換え、三重県と滋賀県の県境の標高 1,212m の御在所岳山頂へ着いた。

ふもとの気温は 19 度だったが山の上ではおそらく 10 度以下だっただろう。セーターを着込んで寒さに備えた。



御在所岳山頂にて

紅葉にはまだ早く、天気は生憎の曇りで肌寒かったが、山頂からは名古屋市内の高層ビル、伊勢湾に浮かぶ中部国際空港そして反対方向を見れば琵琶湖を望むことができた。

当然のことながら下りもロープウェイで、しかも床の一部がガラス張りで真下が見える新型車両を選んでの下山だった。



御在所岳ロープウェイ

駅前で待っていてくれたホテルのバスで本日の宿泊地湯の山温泉グリーンホテルに移動した。

チェックインしてすぐに温泉へ直行。冷えた身体には温泉は最高のおもてなしだった。

天気予報では雨の確率が高かったが、幸いにも降られずにすんだ。幹事の白井が「天気は幹事の責任。どうだ降らなかっただろう」と小鼻をピクつかせて宣った。

宴会までの間は、テレビでプロ野球のドラフト会議に釘付けだったが、一巡目の指名が決まったところで、待ちに待った宴会が始まった。

料理は白井が現役のころにお世話になったホテルの社長から差入れの刺身の盛り合わせも加わり豪勢なものが並んだ。飲み物はビール、焼酎そして地元の“三重の寒梅”の甘口・辛口を堪能した。



宴会（まだ酔っぱらっていません）

部屋に戻っての二次会は、たぶん 11 時ころにお開きになったと思う（というのは吉田がこの間

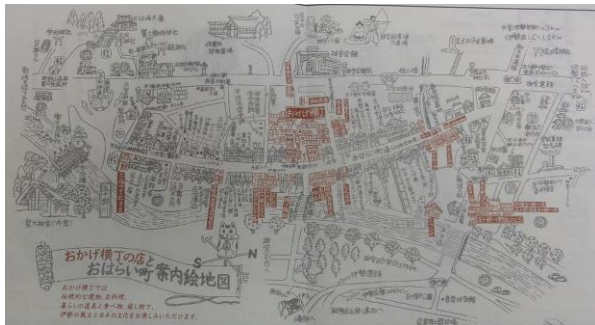
隣の部屋でほとんど寝ていたので詳細は書けない。

みんな寝つきは早い、数時間後にはゴソゴソと起きだしてトイレへ。そしていびきの競演。にぎやかな夜であった。

翌日は本格的な雨。昨日幹事の白井は「今日は保田が幹事だから、天気は彼のせいだ。」と開き直っていた。

朝食後、ホテルのバスで近鉄の四日市駅へ送ってもらい、特急に乗り約1時間で宇治山田駅に到着した。

雨の中、まず歩いて伊勢神宮の外宮へ向かったが、途中で1人がリタイアした。さらに彼をサポートするために2人が抜けたので残りの5人で外宮を参拝した。バス停まで戻り、待っていた3人とともにそろってバスで内宮へ向かった。



おかげ横丁案内図

昼にはちょっと早い、先に食事をしようということになりおかげ横丁で名物の“伊勢うどん”ではなく、漁師めしがルーツの“手こねずし”を食べた。鮪の漬け丼とよく似ていてとてもおいしかった。

次第に雨足が強くなってきた中、リタイアの1人を残して7人で宇治橋を渡り、内宮を参拝した。



内宮参拝

五十鈴川も今日ばかりは流れも早く濁っていた。

皇位継承と大嘗祭が重なって、平日で悪天候に

もかわらず、多くの参拝者でにぎわっていた。

お参りを終えて仕上げは“赤福とお茶”で疲れた身体に甘味を補給した。

ひと休みし、家族への土産物を買ってタクシーに分乗して JR 伊勢市駅へ。予定より1時間早い列車に乗り名古屋方面へ。途中の桑名駅で白井が下車し、残りの7人は無事名古屋へ到着した。

今回の再会を楽しみにそれぞれ家路へと向かった。

今回の卒業旅行では、いろんなことがあった。久しぶりに会ったのでつい飲みすぎて翌日は食欲がないひと。足がつって歩けなくなり、神宮参拝をパスしたひと。スマホを変にいじったため直し方が分からず売ったNTTドコモ（伊藤俊成の元勤務先）が悪いと悪たれをつくひと。帰りの新幹線の指定券の日を間違えて購入していたため買い直したひと。幹事からの案内状に間違えないようにカラフルなマーカーと付箋をつけて参加した几帳面なひと。事前メールで名古屋～四日市間の乗車券は幹事が用意すると書いていたにもかかわらずその区間の乗車券を持っているひとなどなど。

70歳を過ぎた我々が今まで失敗や経験してきたことの数々が今回の旅で再現されたことを暴露したところでこの旅行記を閉める。

《 追 記 》

幹事が案内を出した22名の同期の仲間のうち「病気療養リハビリ中、高齢家族の介護、母親の葬式あるいは既に予定していた旅行等」で13名が参加できなかった。

また「今も仕事の第一線で頑張っており出席できなかったひと」が1名いた。

次回は今回参加できなかった仲間たちともぜひお会いしたいです。

（文責：吉田洋次郎）

令和元年15期同窓会 イン 桑名市

15期 祖父江 直久

今年（2019年）の15期会は三重県桑名市で行われた。幹事は祖父江、副幹事は佐野、特別幹事として桑名の大先輩森川さん（11期）。通常は秋の気候のよい時期に集合するのだが今年は桑名の日本一やかましい祭りと言われる石取祭（いしどりまつり）にあわせて令和元年8月2日、3日、4日の（金）（土）（日）とした。

石取祭は町屋川の河原で拾った石を詰めた俵を春日神社に奉納する神事で平成28年にユネスコ無形文化遺産に登録された。8月2日は24時より春日神社の神主の合図で各町内の祭車に取り付けられた鉦（カネ）と太鼓が一斉に打ち鳴らされる。24時の「叩き出し」で石取祭が開始される様は感動の瞬間と言える。我々はこの日21時より居酒屋「串まん」に集合した。参加者は板尻夫妻、宇野夫妻、間所夫妻、松林、松縄、増田、奥名、鈴木、舟田で幹事3人とあわせると総勢15人の団体となった。前夜祭のような日程でおまけに一年で一番暑い時期によく集まったと思った。狭い店なのでカウンター席まで進出して和気あいあいと宴会は始まった。店自慢の串カツ、串焼きに舌鼓を打ちながら23時頃まで待機した。



叩き出し 前

そのあと祭の中心地の春日神社まで約15分歩いた。春日神社の参道は人が一杯でお互いはぐれないように参拝をして24時の叩き出しを待った。24時に叩き出しが始まった。独特のリズムで打ち鳴らされる鉦（カネ）と太鼓は他所から来た人にはその音がしばらく耳から離れないと思うが、桑名っ子はこの音を手守唄代わりに眠りにつくと言われている。祭車には大太鼓1つ、鉦（カネ）が4つ備えられるが彫刻、薪絵、天幕などどこ

された立派なもので、各町内より今年は39台の参加であった。夜は提灯（ちょうちん）が灯され荘厳な雰囲気になる。一台は家一軒ぐらいの価格といわれている。石取祭を十分堪能した。

2日目の8月3日は佐野君、森川さんにガイドをお願いした。希望者数名の健康診断を当院で行った。また桑名の名所である六華苑に案内し苑内の茶室で抹茶を接待してもらった。六華苑とは旧諸戸清六邸で国指定重要文化財である。四層の塔室をもつ木造二階建て洋館と地泉回遊式庭園を持つ和風建築からなる。洋館は鹿鳴館を設計したことで有名なイギリス人建築家ジョサイア・コンドルが設計した明治大正期を代表する貴重な文化財産で、テレビ、映画のロケにもよく使われる。石取祭も8月3日は試楽（しんがく）といって夕刻から各町内を祭車が練り歩き、鉦太鼓を打ち鳴らしています。

この日は三宅夫妻、上馬夫妻、金井夫妻、川端（16期）が合流、石取祭を見物しながら集合「俵寿司」でまさにすし詰め状態で寿司や味噌田楽を食べた。そのあと夜の祭を見に行くグループ、カラオケに興じるグループなどに分かれた。拙宅で松縄君がピアノの演奏をやってくれるということで自宅まで歩いて妻のマリンバ、母のピアノも加わってにぎやかな一夜を過ごした。

8月4日石取祭の本祭で祭車が整列場所に並び順番に渡祭（とさい）と言って神社の前で鉦太鼓を打ち鳴らします。この日我々は多度山（403m）登山の予定であったが、猛暑日のため中止し、多度大社を参拝したあと川のせせらぎが聞こえる

「多度峡バーベキュービレッジ」で焼肉、若鶏の丸焼きなどを食べた。桑名へもどり名物安永餅をお土産に買い解散した。



多度大社にて

17期ミニミニ同期会 in ウランバートル

あるいは 蒙古放浪Pw

17期 小島 敬

【日程】 2019年6月26日～30日〔4泊5日〕

6/26 成田⇒ウランバートル

6/27 ウランバートル⇒カラコルム(カラコルム博物館、エルデニ・ゾー寺院)《ゲル泊》

6/28 カラコルム⇒ウランバートル

6/29 ウランバートル市内(メルクール市場、恐竜博物館、国立ドラマ劇場、モンゴル料理)

6/30 ウランバートル⇒成田

【参加者】 大家夫妻、杉本夫妻、小島〔計5名〕

これは17期のウランバートルでのミニミニ同期会(大家、杉本、小島)の記録です。発端は、2018年秋の松本・美ヶ原高原での同期会でした。そこで、杉本君が2019年4月からモンゴル国立大学に招聘されるという話が出て、それなら来年の同期会はモンゴルだ、ということになりました。

モンゴルは、ワングルに入部して『蒙古彷徨の歌』を聞いて以来、ずっと気になっていた国です。当時のワングル歌集には「四高寮歌」や「南下軍の歌」、「蒙古彷徨の歌」などが載っていました。どれも古色蒼然としているけど新鮮でした。特に「♪心猛くも 鬼神ならで、男と生まれて情はあれど」と始まる『蒙古彷徨の歌』は壮大な大陸へのロマンが感じられました。いったい蒙古とはどんなところなのだろう、と思っていました。これは行って確かめるしかありません。

出発日に成田空港に集まったのは大家夫妻と小島の3人だけでした。皆さん、仕事の都合、家庭の事情、個人の嗜好(羊の肉が食べられない等)があるので仕方ないことです。成田からウランバートルまで直行便で5時間。飛行機は中国の北京上空から西北に向かい、万里の長城を越えました。眼下に見えてきたのは内モンゴルのゴビ砂漠。地平線まで続くゴビ砂漠は圧巻でした。モンゴル領空にはいると緑が徐々に増えてきました。木々は無く、ただ草原が広がっています。大地が濃い緑の絨毯に変わるころ、機体は高度を下げ、チンギス・カン国際空港へと着陸態勢にはいりました。

1. 草原の国を走る(ウランバートル → カラコルム)

蒙古放浪といきたいところだが、地理感のない僕ら(大家夫妻+小島)がレンタカーでカラコルムを目指したら、放浪どころか迷子になって行き倒れること必定。メカにも弱いので、途中で車が故障したら間違いなく立ち往生。ということで、カラコルムへは車とガイドを手配した。

きょうの気温は10℃～20℃。この時期はよく晴れるそうだが、日頃の心掛けのせい、晴れたり曇ったりのはっきりしない天気だ。ホテルへ迎えに来てくれたのは、日本語ガイドのジャガさん。彼女は日本語をモンゴルで覚えたというが、日常会話では困らない達者なレベル。運転手はウル・ジーンさん。車は、現代自動車のグランド・スタレックス。座席は3シートなので余裕だ。カラコルムはウランバートルから西へ350km(東京～名古屋の距離)。草原の中の本道をひた走る。舗装されてはいるが、かなり痛んでいる。熟練ドライバーのウルさんはところどころ路面の剥がれた道路を時速130kmで突っ走るので、上下左右前後に激しく容赦なく揺れる。悪路で酷使されてきたせいか、とうとう途中で後部ドアが開かなくなった。ウルさんとジャガさんが二人がかりでやっと開いた。もう買い替え時ではないのか。

たおやかな丘が続いている。緑色の濃淡が異なる草原が、どこまでもどこまでも広がっている。ゲル(移動式住居)が点在しているのは、いかにもモンゴルだ。ときおり、はるかかなたを家畜の大群が移動していく。まさに「草原の国」だ。



<草原>

数10km間隔でガソリンスタンドや小さな村がある。時々トイレ休憩で停めてもらう。ある場所

で入ったトイレは生涯忘れられないものとなった。道路わきに、いかにもタダですという風情で無造作に建っている板張りのキジ場があった。有料トイレは遠かったので、やむなくここを使うことにした。大家君が先にはいり、入れ替わりで僕が使った。劣悪な環境のキジ場には山小屋で慣れているつもりだったが、これは想像を絶していた。こんなおぞましいキジ場は初めてだった。どうやって掘ったのか深さ5mはあり、暗くて底が見えない。すさまじい瘴気が湧き上がってくる。蠅すらも生息できないのか生命の気配はない。大家君は3回嗚咽したというが、僕も悪臭で意識を失いかけた。足元の板も危なっかしく、何度もバランスを崩しそうになる。失神したら奈落到まっさかさまだし、きっと誰も助けてくれないだろう。必死で位置を確保して用を済ませ、車に戻った。

2. モンゴル帝国の都・カラコルム

1220年、チンギス・カンの命でカラコルムに都が置かれた。2020年は建都800年だ。行政、文化、宗教、国際交易の中心地として栄えた。城郭に囲まれた都市だったが、今は跡形もなく草地が広がっているだけだ。

カラコルム博物館（日本の無償援助で2011年開館）を見学する。女性の研究者がわざわざ館内を案内してくださった。メインホールには、往時の国際都市の巨大なジオラマがあった。モンゴル帝国が宗教に寛容だったことを示すように、多くのイスラム教寺院や仏教寺院、キリスト教会などが再現されていた。カラコルムには、遠方のヨーロッパや中東からの商人なども大勢住んでいた。彼らにとって自分の信仰する宗教の建物があるのは救いだ。心の安寧を求めて人々は宗教施設で祈った。異国の地でも宗教的な支えがあれば、安心して自分の生を全うすることができただろう。

遺跡の南にあるチベット仏教のエルデニ・ゾー寺院は広さ500㎡、寺域は正方形で108の仏塔に囲まれている。廃墟となったカラコルムの石材を使って16世紀に造営された。欄干、手すり、階段などに碑文が刻まれた石も使われた。廃材利用で作られた寺院だったのが幸いして、これら碑文の解読によってモンゴル史研究が進んでいる。

20世紀初頭、西欧列強の関心が中央アジアに集

まる中で、日本は浄土真宗西本願寺派が大谷探検隊を三次に渡って送り込んだ。第二次大谷探検隊はカラコルムに滞在（1908年）しエルデニ・ゾー寺院に宿泊した。巨大な伽藍がいくつもあり壮麗な眺めだったことが記録されている。



＜華やかで美しい民族衣装＞

「京都の舞妓変身プラン」のカラコルム版。モンゴル人の若い女性観光客が、お姫様になりきっている。（エルデニ・ゾー寺院の入口で）

3. カラコルムでゲルに泊まる

カラコルム郊外、40戸ほどのゲルが並ぶ大規模なツーリスト用キャンプに泊まった。このゲルには、何故か中国のチベットからやって来た若い男性修行僧の集団も泊まっていた。エルデニ・ゾー寺院でラマ僧の研修でもあるのだろうか。彼らはスマホで自撮りしたり、広場に集まってお喋りしたりして、とても楽しそうだった。

大家夫妻とは別々のゲルへ。1人用は犬小屋のような大きさかと思っていたら、普通サイズのゲル（シングルベッドが三つ）で安心した。ゲルは直径5m、高さは優に3mはある。テントのように狭くないし天井が高いので圧迫感もない。羊毛のフェルトで覆われ暖かい。トイレ、シャワーはないが居住性は抜群だった。天窓から光がはいり、放射状に張り渡された梁が日時計となるそう。

ゲルは必ず南向きなので、ゲルから出て左が東、右が西となる。モンゴル語では左と東、右と西は同じ単語だ。彼らが古代からゲルで暮らす遊牧民であることが言葉に表わされている。

夕食はレストラン棟で。外国人用にアレンジしたコースが出た。きのこのスープ、ポテトサラダ。メインは焼肉入りのスパゲティ。デザートはヨー

グルト。きのこスープは昼も出たが、きのこに癖がなく、やさしい味がしておいしかった。



＜ゲル内部 中央左が暖房用煙突＞

夜はスタッフが来てストーブに火を入れてくれた。3人でその様子を観察する。まず練炭をたくさん入れ、その上に薪を乗せてバーナーで点火する。中央の煙突から換気される。外に出てみると各ゲルから煙がもくもく出ていた。大家夫妻のゲルはすぐ暖かくなった。子供のころからゲルに泊まるのが夢だったという大家君は大満足だ。一酸化炭素中毒が怖い僕は、火の気のない自分のゲルに戻り、持参のシュラフで寝た。

現代の遊牧民は電気を太陽光発電でまかない、BSのパラボラアンテナで衛星放送を見る。日本の横綱白鵬や鶴竜の活躍も、ゲルで見ていることだろう。テクノロジーの進歩は、遊牧民が一番享受しているかもしれない。数百km離れたウランバートルの銀行口座の資金移動はスマホで簡単にできる。ネットとGPSでゲルの現在地を特定して郵便物を配達するサービスは既に始まっている。ドローンを使ってゲルに荷物や郵便物を配送する時代は、そんなに遠いことではなさそうだ。

4. ウランバートルを歩く（ミニミニ同期会）

6月29日（土曜）。きょうは一日、杉本夫妻にウランバートルを案内していただく。17期のミニミニ同期会だ。天気は晴れ。杉本夫人によれば、

冬枯れで色彩の無かった街は6月になって一斉に木々が芽吹き、あつというまに緑一色の装いに変わったそうだ。僕らが訪れたのは、まさに初夏のウランバートルだった。移動手段は徒歩とバスだ。タクシーは白タクなので僕ら外国人には使いこなせない。満員のバスに乗り込んだら、すぐ席を譲られた。生まれて初めて譲られた席に、とまどいながらも、ありがたく座らせてもらった。

最初に連れて行ってもらったのは、市内有数の規模を誇るメルクール市場。露店ではなく大きな建物の中にたくさんの店が並んでいる。金沢の近江町市場みたいだ。にぎやかで活気がある。調味料、缶詰、干物などの加工食品。畜肉や野菜、果物などの生鮮食品。国内外からの様々な食品が売られていて、見て回るだけでも楽しかった。食材を手に入れるため杉本夫人もよく訪れるそうで、市場の中を隅々まで知っていた。

お昼はホテル近くのイタリア料理店で。杉本夫妻から現地での仕事や暮らしぶりについて話を聞いた。事前に奥さんから日本食を持参してほしいと依頼されていたので、異国で食べ物も合わず苦勞されているのだろうと勝手に想像していた。ところが会って吃驚、とても活発な奥さんだった。羊の肉が苦手なだけだった。ウランバートルに着いてすぐ日本語学校でボランティアを始め、ひとりでバスを乗りこなし、モンゴル語はできなくてもジェスチャーと度胸でコミュニケーションを取り、楽しい毎日を送っていたのだ。

5. 恐竜博物館でゴビ砂漠の恐竜化石を見る

博物館前で大家君が着ているのは、ワンゲル60周年記念Tシャツ（次頁の写真参照）だ。最初、誰も図柄が何かわからず、縦書きのモンゴル文字ではないかという説も出たが、よくよく見れば登山靴をデザインしたものだった。

モンゴルと言えば恐竜。卵の化石が世界で初めて発見されたことでも有名だ。館内にはゴビ砂漠で発掘された恐竜化石が展示してあった。

ハンマーのような尾の先端が特徴のアンキロサウルス（植物食）。同種のサイカニアの頭骨。サイカニアは植物食だけど鬼のような形相だ。きっとこの顔で肉食恐竜を寄せ付けなかったのだろう。他には、タルボサウルス（肉食）、ミノ

タウラサウルス（肉食）、プロトケラトプス（植物食）、オビラプトル〔卵泥棒〕（雑食）など。



＜恐竜博物館前で同期3人（小島、杉本、大家）＞

6. モンゴルの歌舞音曲を楽しむ

杉本君が国立ドラマ劇場（1931年設立）の切符を手配してくれた。それにしても、卒業して40数年後にこのメンバーでモンゴルの民族芸能を鑑賞する日が来ようとは、想像すらできなかった。金沢の安下宿で文化とは程遠い生活をしていた僕らも大人になったものだ。舞台では演目が次々と変わり、飽きることがなかった。1人は半分寝ていたが、他の4人は熱心に最後まで観ていた。

ホーミー（モンゴル喉唄）、オルティンドー（モンゴル民謡）、馬頭琴（草原のチェロ。二弦だけで、どうしてこんなに情感あふれた演奏ができるのだろう）、コントーション（軟体芸。女性二人の組み技。背骨が折れるのではないかというほど極限の柔軟さを表現）、ビー・ビルゲー（少数民族の舞踊。両肩を規則的に力強く上下させて騎馬の躍動感を出すなど、ダイナミックな踊りが多かった）、仏教仮面舞踏ツァム（多彩な守護神が登場。守護神「白い老人」の仮面の表情がワンゲルOBの某先輩にあまりに似ているので驚いた）。

最後は伝統楽器（馬頭琴、琴、三味線、ラマ笛、角笛など）のオーケストラ演奏で締めくくり。モンゴルは豊かな文化を持つ国だと思った。

7. モンゴル料理を食べる

意外だったのは、ジンギスカンがないことだった。ジンギスカンは日本の焼肉料理なのだ。

夜は杉本夫妻が洒落た雰囲気のレストランに連れて行ってくれた。前日の夕食は火鍋（Mongolian Hot Pot）だったので、他の料理を注文した。ボーズ（ひき肉を小麦粉の皮で包んで蒸したもの。小籠包に似ていて、いくらでも食べられる）、ホーショール（ひき肉を小麦粉の皮で包んで揚げたもの）など。「モンゴル行くなら、とにかく馬乳酒だけは飲んできて」と息子に言われた大家君だが、馬が出産を終え搾乳可能な8月～9月の期間限定品とのこと。馬乳酒のカクテルなら作れるというので試しに1杯だけ頼む。少し飲ませてもらったが、ほのかにカルピスの味がした。そういえば、カルピスは2019年7月7日に発売100周年を迎えた。創業者三島海雲は、内モンゴルで出会った酸乳（発酵乳）にヒントを得て、試行錯誤を繰り返しカルピスを作ったそうだ。

8. 『蒙古彷徨の歌』の舞台は何処だったのか？

モンゴルへ行ったけど、「草原の国モンゴル」と『蒙古彷徨の歌』に出てくる「蒙古の砂漠」がどうしても結びつかなかった。蒙古放浪の舞台は、外モンゴルではなく内モンゴルだったのだ。

外モンゴルでは1921年に人民革命が成功し、1924年に独立した。日本で『蒙古彷徨の歌』が流行し始めたのは1920年代と言われている。大陸へ本格的に乗り出した時代だが、すでに社会主義化した外モンゴルに日本の影響力はない。当時の人々は、日本の覇権が及んだ満州と内モンゴルを「満蒙」として捉えていた。『蒙古彷徨の歌』がこの時代背景から生まれたとすると、歌に登場する砂漠は、万里の長城の北に広がる、大陸浪人や馬賊が跋扈した内モンゴルの砂漠だ。

杉本君がいなければ、まったくご縁の無かったモンゴル。今回、杉本夫妻と大家夫妻のお陰で、貴重な面白い体験をすることができました。同期の仲間にはありがたいと、改めて思いました。

今回、私達は北海道の羊蹄山、朝日岳、十勝岳に日帰りで登ってきました。遠征で行く登山は初めてであり緊張しましたが今思うと実に充実した経験になりました。また観光も多めにでき北海道を誰よりも最大限に満喫できたと思います。その内容を以下に記述します。

<1,2日目>

8月31日の夜、私達は部員の暖かい見送りの中金沢駅を出発し、フェリーに乗るために福井県の敦賀港を目指しました。そして到着後、苫小牧行きのフェリーに乗って北海道へ向かいました。私はフェリーに乗ることが初めてで最初船酔いに悩まされましたが徐々に身体が順応し、最終的には楽しむことができました。敦賀を旅立っておおよそ20時間後、9月1日の夜には何事もなく北海道に上陸し、その日は苫小牧で泊まりました。

<3,4日目>

この2日間は羊蹄山へ向け車で移動しながら様々な観光地を巡りました。少し遠回りしましたが例えば、登別の熊牧場、函館の赤レンガ倉庫、室蘭の地球岬など行くことができ記憶に残る経験ができました。そして、その夜羊蹄山の麓へ行きテントを張って、早朝から出発できるよう夕方頃には就寝しました。

<5日目>

この日は北海道へ来て初めての登山であり、私を含め仲間達は高揚していました。午前4時10分起床、4時30分出発というかなり早い時間の日程にも関わらず班の皆は4時20分頃には出発の準備ができており、やる気がとても伝わってきました。予定通り出発後、3時間かけて頂上を目指しましたがこの山は坂が急な場所が多く体力をかなり消耗するため、班の一人がダウンしてしまいました。それでもお互いに励まし合ってなんとか頂上に登ることができました。偶然にも天気にも恵まれ、そこから見る景色は絶景であり、達成感につつまれました。その後、山をくだり小樽のコテージを借りて宿泊しました。

<6日目>

旭岳付近のキャンプ場に移動しつつ、札幌と旭川を観光しました。

<7日目>

午前6時頃に旭岳まで移動し、ロープウェイを経て登り始めました。この山は外国人の方や観光客が多く、また、登山道もそこまで急ではなかったため、比較的楽に登ることができました。登山途中、姿見の池や、本州では3000m級の山にしかないような高山植物を見ることができ、楽しむことができました。2時間30分ほどかけて頂上に着くことができ、そこから見る景色は絶景で、大雪山系の山々を見渡すことができ、とても爽快な気分になりました。下山後、十勝岳付近のキャンプ場に車で移動して、体を休めました。

<8日目>

十勝岳登山はこの北海道合宿で1番体力的にも精神的にも、辛いものとなりました。最初の方は登山道がなだらかになっているにもかかわらず、歩きづらい道が続き、疲れた体にはとてもストレスのたまるものでした。また途中では、腐卵臭のする道があり、喉や鼻を痛めつけられたので、急いで匂いがしなくなるまで歩きました。それらのような辛い道が続いたので、班のみんなで励まし合いながら登り続けました。頂上に着いたときは、曇ってしまい景色を見ることはできませんでしたが、登頂した時の達成感はとても心地よかったです。

<9日目>

この日は鵲川でラフティングを体験しました。とてもいい体験をできました。

次の日にはトムラウシに登る予定でしたが、雨予報になっていたため、中止にすることになりました。悔しかったので、もう一回登りに行きたいと思っています。

<10、11、12日目>

トムラウシに登ることができなかったため、10日目の日程を変更し、10、11日目は観光をしました。その後12日目にフェリーに乗って金沢に帰還しました。

今回の夏合宿の12日間はあっという間でした。3年生が2人と一年生が4人という配分の班でしたが、気を遣い合うことなく、とても楽しむことができました。来年は僕たちも後輩ができるので、先輩として、いい姿を見せることができるように日々精進していきたいと考えています。



旭岳・2019.9.6（7日目）

夏合宿 奥穂高

64期 橋本真樹

私たちのパーティーは、1年生3人、3年生3人の計6人で、日本百名山に指定されており、日本第三位の高さを誇る奥穂高岳に9月3日から6日の4日間で行ってきました。今から移動を含めて、合宿のスケジュールと感想を記します。

☆1日目

移動（金沢～長野）

＜上高地―明神分岐―横尾―Sガレー―涸沢＞

早朝にやまや前を出発し、高速道路を通りました。移動の時間、先輩の安全運転のもと、車中で皆と楽しい会話したことを覚えています。そして、あっという間に長野県に入り、私は、初めての夏合宿に楽しみな気持ちと、ちょっとした緊張の両方を抱きながら、シャトルバスに乗って、上高地に到着というアプローチをしました。

上高地はとても空気が美味しくて、リフレッシュした状態で登山がスタートしました。横尾までは比較的平坦で道幅が広がったです。みんなで和気あいあいと、鼻歌でイントロクイズをしながら歩きました。そしてなんと、木々にはサルがいました。また、私たちが歩く道の目の前をのんびり歩いていたのです。とても驚きました。

横尾で小休憩をとったあと、しばらく歩くと、ごつごつとした岩の上を歩きました。途中で、雨が降ってきて、きついなと思いながらも、何度か休憩をとって、一定のペースを保って歩きました。しかし、1日目の山場である、Sガレーで、私は完全にバテてしまい、ペースが乱れ、弱音をはいてしまいました。そんな時でも先輩は、先頭に立って、「あとちょっとだし頑張ろう」とメンバーに声かけてくれました。そのおかげで、乗り越えることができました。あのときの先輩のたくましい背中には忘れないです。

無事みんな涸沢に着いたときは、また晴れが戻ってきて、テントを張り、夕食を食べようとしたその時、豪雨が襲ってきました。雨だと、移動も大変だし、なにより寒いことがかなり自分にとって辛かったです。

でも、夕食だった、石川名物、とり野菜みそ鍋を皆で囲んで食べて、心も体も温まりました。明日は1日中晴れてほしいと願い、シュラフに入りました。☆2日目 沈殿

朝起きてみると、雨音がテントの中でまだ鳴り響くぐらいに激しく降っていました。朝食を食べた後も雨がやまなかったので、予定していた奥穂高岳を3日目に持ち越すことに決めました。

この日はみんなと涸沢ヒュッテの小屋で、談笑したり、名物のおでんを食したりしました。気温は雨でやはり低かったのも、そんな中のおでんは格別でした。アタックできなかったのは残念でしたが、メンバーとゆったりとした有意義な時間を過ごせたし、こういう日もたまにはあってもいいのかなと私は思いました。

でも、明日こそは、なにがなんでも登りたいという気持ちが強く、でも奥穂高に私は登れるのかという不安を抱えながらも、全力で「登れますように」と祈願して寝ました。

☆3日目

＜涸沢ヒュッテ―穂高岳山荘―奥穂高岳＞

昨日の祈願が伝わったのか、起きたら、雨音が一切聞こえない。テントから出ると、昨日にはあった濃い霧がなく、さわやかな天気でした。

本来の計画だと、2日目に奥穂高、3日目に北穂高に登る予定でしたが、沈殿があった関係で、メンバーで話し合った結果、奥穂高岳に登ることに決めました。ヘルメットを装着して、いざ出発。

1 日目は、今までの山行で 1 番重い荷物を背負っていて、しんどかったけれど、今回はサブザックでの山行だったので、荷物の負担がなく、いきいきと歩くことができました。

しばらく登ると、ザイテングラードが見えてきました。傾斜が高く、かつ大きい岩が私たちを待ち構えていました。緊張しながら、慎重に登っていました。ザイテングラードの中腹付近で、私の後ろからメンバーの叫び声が聞こえてきました。後ろを振り返ると、無事メンバーはいましたが、話を聞くとところによると、あるメンバーが足を滑らせて滑落しかけたそうです。ザイテングラード。甘くないです。少しの油断も許すことができない。より緊張感をもって進みました。

約 2 時間で穂高岳山荘に着きました。顔を上にむけると、そこには穂高岳が間近に。着実に近づいていることが嬉しくて、疲れが少しだけ癒やされた気がしました。小休憩をした後、再出発して、山頂に向かいます。山頂までの道は、複雑な足場が多く、崖があるのは当たり前なぐらいで、いくつもの鎖、はしごを経験しました。今から思うと、怖すぎて足がすくんでもおかしくないレベルでした。でも、山頂の直前は、あまり怖さを感じず、むしろ楽しく登っていました。それは、ここに至るまで、危険な箇所を登ってたくさん経験値を得たからだと思います。

登り始めて約 3 時間、ついに山頂に着きました。青空がひろがり、遠くの山もくっきり見える。まさに絶景でした。自分は今、3190m の山の上に立っているのだと実感したのと同時に、達成感を感じました。写真で見るのとは違う、肉眼で見た絶景は、心に今でも残っています。その後、慎重に下り、無事涸沢に着きました。



9 月 5 日 奥穂高山頂にて

<涸沢-S ガレー横尾>

天気が良い状態が続いたため、今のうちに下っておこうということで、横尾まで下ることにしました。そこで、今までは先輩が先頭をつとめていましたが、リーダーになるための練習として、1 年生が先頭をつとめようということになり、1 年の男子メンバーがすることになりました。不安だと彼は話していましたが、メンバーの体調を気にしながら、適切なペース配分、休憩を取り入れてくれて、彼は、先頭の役目をちゃんとこなしました。そして無事、横尾に到着。

その後に、一緒に登山したメンバーと飲んだ、小屋で買った冷えたジュースは体に染みわたりました。個人的に、早めに夕食を食べた後、テントの中で寝るまで、ゆっくりのんびりメンバーと話せたのが楽しかったです。

☆4 日目 <横尾-明神分岐-上高地>

移動（金沢～長野）

爽やかな晴れの中、奥穂高に無事登頂できた 3 日も終え、あっという間に最終日。上高地までは平坦な道が続いたので、皆、楽に感じたのか、コースタイムの約 2 分の 1 で上高地に着くことができました。天気も快晴で暖かく、上高地のそばを流れる川が光に反射してきらきら輝いていて、大変美しかったです。河童橋をバックに記念撮影。みんな笑顔で良い一枚です。その後、先輩の車で平湯温泉に行きました。3 日ぶりのお風呂は最高でした。汚れがすっきりとれて、さっぱりしました。緑豊かな上高地とお別れして、帰りも安全運転で金沢に着いて、4 日間の夏合宿を終えました。



9 月 6 日 上高地にて

☆終わりに

夏合宿は、荷物が重くて、登りがとてもきつく感じたし、雨に何度か見舞われて、精神的にまいってしまいそうでした。でも、なんとか耐えることができたし、メンタルが鍛えられた良い山行でした。また、初めての夏合宿だったので、わからないことなどいくつもありましたが、先輩方が優しく教えて頂いたり、疲れてしんどいときも、励ましたり、荷物を後輩の分まで持ってくれたりなど、さまざまな形で、私たち1年生を引っ張ってくれました。先輩方にはありがたい気持ちでいっぱいです。私も、来年は、自分のことだけではなく、後輩をサポートすることができるように頑張ります。

最後に、奥穂高山頂には体調不良が原因で、全員の登頂にはなりませんでしたが、全員無事、事故やケガもなくお家に帰ることができました。それに感謝だと思いました。この4日間で、メンバーとの親睦を深められたし、かけがえのない充実した夏合宿となりました。メンバーのみんな、本当にありがとう。

夏合宿 槍ヶ岳・蝶ヶ岳

64期 木戸浦 悠斗

9月1日～9月4日にかけて長野県の槍ヶ岳・蝶ヶ岳の山行を4人で行った。当初の予定では、表銀座山行だったが、メンバーの都合と人数の関係から、予定を変更した。

山行日程

9月1日

金沢発

上高地着

12時54分 上高地発

13時40分 明神館着

14時40分 徳沢キャンプ着

15時35分 横尾キャンプ着

9月1日はここで山行終了した。横尾で一泊し、槍ヶ岳の山行に備えた。

9月2日

3時 横尾キャンプ発

4時25分 槍沢キャンプ着

9時 槍ヶ岳山荘着

11時30分 槍ヶ岳山荘から下山開始

14時20分 槍沢キャンプ着

16時10分 横尾キャンプ着

二日目は横尾キャンプ場から槍ヶ岳をピストンした。槍ヶ岳山荘に近づいたあたりから豪雨に見舞われ、山荘でしばらく雨をしのいだ。2時間ほど待機したが雨が収まる気配がないため、下山を決定した。槍沢キャンプから槍ヶ岳山荘までの道のりは、前半は川沿いを歩き、後半は一部危険な岩場を歩いた。全体的にきれいに道が舗装され、特別危険な場所はなく、歩きやすい道のりだった。

9月3日

4時 横尾キャンプ発

8時45分 蝶ヶ岳山荘着

10時30分 横尾キャンプ着

11時50分 横尾キャンプ発

13時20分 徳沢キャンプ着

14時30分 明神館着

15時30分 上高地キャンプ場着

三日目は、蝶ヶ岳をピストン山行した。蝶ヶ岳まではジグザグとした道がほぼ山頂まで続いていた。山頂付近は強い風が吹いており、視界が霧でふさがれていた。山頂からの下山時、空が晴れ始め、穂高のきれいな山々が雲間から時々見ることができた。

9月4日

9時 上高地発

13時 富山駅着

解散

夏合宿 槍ヶ岳

64期 加藤 豪琉

僕たち槍ヶ岳パーティーが行った夏合宿は本来折立から入山し黒部五郎岳、双六岳、槍ヶ岳を通り新穂高温泉駅に向かう5泊6日の予定でしたが、天候の悪化などの様々なことがあり中止という形で幕を下ろしました。僕たちがなぜ今回の夏合宿を中止としたかその過程をここに記します。

僕たちは8月21日に団体装備を配り、22日からの登山に向け着々と準備を整えていきました。そんな中、班メンバー全員が気にしていたことは合宿中の天気が悪いということでした。僕たちは奇跡的に合宿中の天気が回復することを祈り合宿当日を迎えました。

合宿当日の22日、残念ながら天気の良いことはなく僕は雨に打たれながら集合場所である金沢駅に向かいました。富山駅に向かう電車の

始発に乗るということもあり、かなり朝早い時間に集合するということも遅刻する人も出るかと思われましたが無事全員その電車に乗ることができ、富山駅に到着しました。

富山駅から入山場所である折立まではあらかじめ予約しておいた2台のタクシーを使い移動しました。タクシーで移動しているとある場所が通行止めとなっていました。タクシーの運転手が車を降り事情を聴くとその場所からある程度離れた場所で土砂崩れがあり道をふさいでしまっており、さらに不運なことに数日は通れないとのことでした。

折立に行くことができず困っていた僕たちが運転手さんの助言もあり、立山に行くこととしました。急遽立山に行くこととなった僕たちは立山駅で室堂までの切符を買い、室堂から雷鳥沢キャンプ場に行きました。

キャンプ場に行く道中天候は悪く火山ガスが発生しているところを通ったので気分が悪くなる人もいました。

天候はさらに悪化し雷鳥沢キャンプ場近くの避難小屋みたいなところで休憩をしていました。休憩中、班メンバーでこれからの予定について話しました。天候が悪くなる一方であり、回復する見込みもなく明日明後日と停滞する可能性を考慮した僕たちは今回の夏山合宿を中止にする決断をしました。

そして立山を下山し、その日のうちに富山駅までいき五泊分の食料を班メンバーで分配し自分たちの合宿終わりました。

後日地元に戻った僕は、高校の友達で大学の登山部に入っている人と話す機会がありました。その人も僕たちと同時期に槍ヶ岳に行っており、一日停滞して次の日死ぬ気で下山したそうです。

この話を聞き僕はあの決断が間違っていなかったと思いました。次は快晴の時夏合宿がしたいと思いました。

以上で僕たち槍ヶ岳パーティーの夏合宿の記録を終わります。



夏合宿 南アルプス

64期吉岡 彩乃

私たちのパーティーは北岳を中心に5日間をかけていくつかの南アルプスの山々を縦走しました。また、縦走だけでなく、山梨観光や富士急ハイランドに行ったりと、南アルプスPのみんなでもとても楽しく、濃い時間を過ごすことができました。

<1日目>

金沢駅を出発し、お昼ごろに甲府駅に到着。そのまま、徒歩で近くの山梨名物ほうとうを食べる。その後、バスにて広河原に行き、テント泊。

<2日目>

当初の予定では、広河原を出発後、北岳肩の小屋をゴールとし、3日目に北岳に登頂する予定だったが、そのまま北岳を目指せそうだったので、予定を変更し、北岳に登頂することにした。

途中、暑さと高山病で何名か体調不良を訴えたが、何とか全員で登頂することができた。日本で二番目に高い山から見る景色は絶景だった。その後、北岳山荘にてテント泊。

<3日目>

3日目も少し予定を変更した。北岳山荘を出発後、間の岳に登頂。その後両俣小屋を目指した。途中、崖など危険な場所もあり、とても疲れたが、両俣小屋に着くと隣に川が流れており、みんなで川遊びをしたら、一気に疲れが飛んだ。

<4日目>

朝早くに起床し、両俣小屋から約10キロの道のりをひたすら歩き、長衛小屋に到着。長衛小屋には、南アルプスの天然水で有名な川があり、み

んなで水遊びをした。川があるだけでこんなに楽しいのかと思うくらい、みんなではしゃぎ、とても楽しかった。

<5日目>

5日目は、南アルプスを象徴する甲斐駒ヶ岳に登頂した。途中、きつい傾斜があったり、怖すぎる崖があり、とてもつらかったが、甲斐駒ヶ岳の白い岩や、絶景を見たら一気に疲れが飛んだ。

<6日目>

長衛小屋を出発し、バスにて温泉に到着。みんな疲れをいやした。その後、甲府駅に戻り、カレーと焼き肉を食べた。本当に美味しかった。夜は、ゲストハウスに宿泊した。

<7日目>

ゲストハウスを出発し、富士急ハイランドに行った。たくさんの乗り物に乗ったり、お化け屋敷に行ったりと、とても楽しかった。

私たちのパーティーはみんな仲良くずっと笑顔が絶えず、本当にこのパーティーでよかったと思った。途中つらい場面もあったが、このメンバーだったからこそ乗り越えることができたと思う。メンバーには本当に感謝しています。



甲斐駒ヶ岳山頂

夏合宿 ハヶ岳

63 期中山 晋志

8月10日出発の朝、早朝にも関わらず金沢駅に差し入れを渡しに来てくれたOBの方々を見て、伝統のある部活に自分は入ることができたのだと実感した。僕は、大学に入るまでに山に登った記憶がほとんどない。登ったことがあるのはせいぜい地元の筑波山ぐらいであった。僕は、高所恐怖症である。特に、山が好きなわけでもない。そ

れにもかかわらず、僕がワンダーフォーゲル部に入った事にはきちんと理由がある。それは新しいことに挑戦したいという「欲」である。

大学進学とともに一人暮らしをはじめ、知り合いのいない世界に入ったせいでそんな欲が生まれたのだと思う。でもそれでもなぜ「山」を新しい挑戦したいことにしたかは分からない。結果として今、僕は山という新しいことに挑戦することを選んで良かったと思えているので奇跡が起きたといえる。

夏合宿の山にハヶ岳を選んだ。なぜなら、このハヶ岳パーティーはそこまで過酷な山登りでないと聞いていたからだ。高所恐怖症の僕にとってはその言葉が一番魅力的であった。しかしこの言葉に騙されることになった。過酷でないと聞いていたのに自分にとってはとてもタフな山登りになったのだ。これはそういった先輩に悪気があったわけではない。僕が本当に高いところが苦手だったためである。3日目に登った横岳で震えていた足の間を今でも覚えている。たくさんの山を登ってきた先輩方が普通に進む道も自分にとってはとても険しい道であった。しかし、今の自分にとってあの言葉に騙されたことは、悪い記憶として記憶されていない。なぜなら怖い思い以上に自分にとって得られたと思うことやものがあまりに大きかったからだ。

まず、景色が忘れられない。この合宿を通して見たすべてのものは美しいものだらけであった。天気が良かったからということも影響しているかもしれないがとてもきれいであった。例えば茅野駅に向かう電車が姨捨駅に泊まった時、車窓から見た長野の街の景色はとても僕の乏しい語彙力では表せないほどきれいであった。あえて、形容するならば「となりのトトロ」の世界のような美しさであった。



姨捨駅・8月10日

でも、ここまで一緒に登ってきたみんなと最後も同じように登りたいという気持ちが恐怖心を打ち消してくれた。登り切った後の気分は最高だった。

息子との朝日連峰縦走

4期 佐藤 秀紀

8月12日～15日、朝日連峰を次男と縦走してきた。昨年登る予定であったが、その直前に突然私が肺炎になり今年に延期したものである。その前の年飯豊連峰を縦走したので、隣接する朝日連峰をやろうとなった。この連峰の上には月山があり、さらに北には鳥海が位置する。朝日連峰は新潟と山形の県境にあり、主峰の大朝日岳(1,870m)は山形県側にある。経路は山形県の大鳥登山口から入り、朝日鉱泉へ下る南下コースを取った。

初日(8月12日)。私は金沢(北陸新幹線)上越妙高(信越線)新潟(羽越線)鶴岡下車。息子とは新潟で落ち合う。山形県鶴岡駅からバスにて大鳥登山口まで入り、朝日旅館に投宿(今年より土日は鶴岡・泡滝ダム間のバスが運行されるようになった)。

この上に大鳥池という大きな池がありその周辺では大きな岩魚が取れるらしく全国的にも多くの釣り人達がやってくるようだ。近くにまぼろしの大魚タキタロウにちなんだ記念館がある。

二日目(8月13日)。6時に宿の車で泡滝ダム登山口まで送ってもらう(無料)。6:30登山開始。谷川に沿って大鳥小屋まで3時間半。10時大鳥小屋から本格的に登りとなる。この日気温高く、急登もあって意外と疲労した。息子があまりにしんどそうなので、途中でザックを交換した。さすがに息子のザックは重い。それでも何とかしばらく担いでいるうちに息子も回復したようなので元に戻す。

予定よりかなり遅れて16時ようやく以東小屋に到着。小屋には水がなく、疲れた体で下の雪渓の水場までの水汲みは厳しかった。

この辺りの小屋は飯豊連峰と同じく、管理人はいるが、寝袋・食料持参の避難小屋である。

宿泊費1,500円。缶ビール800円。同宿人で沢を3泊もして登ってきた若い人がいて驚く。すごい人いるものだ。同宿の人たちと外のテーブルあたりの山々を見ながら一杯飲みながらの談笑は楽しく得難いものがある。

三日目(8月14日)。6時以東小屋出発。今日がメインの縦走路。すぐ以東岳(1,772m)頂上に至る。早朝の尾根歩きは気持ちが良い。天候は晴れだが、内陸部側には雲があり尾根で天候が分断されて



寒江山からの尾根道を行く(8月14日)

いる。遠く一昨年縦走した飯豊連峰が見える。ヒナウスユキソウ、タカネマツムシソウ、ハクサンシャジン、ハクサンイチゲなどの高山植物が多くみられる。ガスが出てきて涼しい。8:30 孤穴小屋。10時寒江山(1,695m)、11:40 竜門山(1,688m)、14:00 西朝日岳を経て16:00 大朝日小屋到着。ここも水がなく、直前の雪渓近くの水場で水を補給。ついでに、途中の竜門小屋で仕入れた缶ビールを冷やす(大朝日小屋には缶ビールがない)。

今日も後半は昨日の疲れが取れず予定よりかなり遅れる。しかし、ゆったりとした尾根歩きと涼しいガスに助けられた。この小屋は大変混むそうだが今夜は8人ほどでゆったり休めた。

四日目(8月15日)。早朝に起きて大朝日岳(1,871m)へ登りご来光を拝した。



大朝日岳山頂(8月15日)

登頂時はガスでご来光は見られないかと思われたが運よく晴れて幸いだった。

6:25 小屋を出発。晴れ。今日は縦走最後。しばらく下り、後ろを振り返ると大朝日岳のどっしりとした山塊が青空に映える。



大朝日岳 (8月15日)

8:00 急登の小朝日岳(1,647m)山頂に至る。さらに鳥原山(1,429m)を越えると鳥原小屋の手前に水場があり、水を補給ししばし休憩(10:55)。

その後は尾根をほとんど水平に長い下りとなり、最後にジグザクに急に谷川まで降りると鉱泉まで500mの看板。思わず歓声を上げる。それほど長い下りであった。

その後、揺れる吊り橋を渡り、少し登ってようやく朝日鉱泉に到着(13:30)。ご苦労様でした。風呂に入り、生ビールで乾杯。おいしい蕎麦を頂き、14:30のバス(小型バン)に乗る。乗客6人。15:30左沢(あてらざわ)駅。16:15同発、16:56山形着。17:05山形発(山形新幹線)、19:22大宮乗り換え、21:54(北陸新幹線)金沢着。

今回は、初日の暑さの中の登りの疲労による体力消耗、それに伴う体調悪化が後まで尾を引いたやや厳しい山旅であった。しかし、それも振り返れば思い出深い山旅であったともいえる。

また、ゆったりとした、高山植物にあふれた尾根歩きや、二つの避難小屋を通した同じ山旅人たちとの出会い・交流印象深い山旅でもあった。山旅すべてを通して何かと世話になった息子のお陰で、これら思い出深い山旅を無事終えることができた。心より感謝したい。

しかし、寝袋や食料を担いでの連泊の山旅はさすがにしんどくなり、淋しい思いもあるが今回を

最後にしようと息子に告げたのである。

これまで息子との登山は、2012年屋久島宮之浦岳が始まりで、2013年仙丈ヶ岳・甲斐駒ヶ岳、2014年白峰三山(北岳、間ノ岳、農鳥岳)、2015年鳳凰三山、2016年燕岳・大天井岳・常念岳・蝶ヶ岳、2017年飯豊連峰。そして2019年朝日連峰。

7年間、よく登ってきたものだ。持つべきものは息子である。感謝感謝。



夏は暑過ぎて9月は台風が多発し、登山の気分になれずついに10月の秋山の季節となってしまった。行き先を思案していたところ、山岳誌の記事で「北陸新幹線 始発に乗れば山荘から剣・立山の夕景」という見出しが目に入った。これが表題になったプランなのだが、2泊3日ののんびりした小屋泊の山行ならルートに多少問題があるが何とかなるかと決めた。

従来は新宿～松本から北アルプスの長野側からのアクセスの発想であったが、確かに北陸新幹線なら長野からのアクセスもあると気が付いた。

このプランのメリットはご存じの八方尾根のリフトに乗って標高1,800mまで登り、標高差1,000m弱で山荘に達する。帰路は標高差1,000mを遠見尾根から下り、1,500mのアルプス平からやはりゴンドラで下山できること。大変に高齢者には優しいコースなのだ。しかしながら最大の難点は、後立山連峰に特有の瘠せ尾根と、岩場のクサリ場が続くことである。最近特に左眼が黄斑変性とかで視力が悪化したので、バランスが悪く階段の下りでは苦勞している。個人的にはこの点が大変に気がかりであった。

還暦過ぎて登山を再開したが、相手が見つからず常に単独行となってしまう。身内からはその危険性を指摘されており、自覚はしているのだが簡単に相手がおらず今回も一人の行動となってしまった。

山荘を確認すると今年の営業は10月14日までで、予約は不要とのこと。天候の具合で連休前の10日あたりを出発日と予定したが、急に台風19号が発生してしまった。急遽8日からと変更したが、この日は長野地区が悪天候の予報であったが、日時の余裕なく実行することにした。結果は久しぶりに風雨のなかでの登山となってしまった。

八方尾根からの登りは緩やかで何も問題はなかったが、視界ゼロのなかを黙々とあるいた。登山口から女性のパーティと相前後して歩いたが、この連中とは不思議と白馬駅まで一緒になった。唐松山荘は新しいのだが、食事はあまり良くなかった。登山者はそれほど多くなく、食事中は山自慢したがる中年の男たちよりも、会話して楽しい

登る途中で一緒になった女性たちに加わった。

日本人ではないので尋ねると香港からきたとか。久しぶりに英会話を楽しんだ。どのようにこの山旅を企画したのかと聞いたら、インターネットだそうだ。案内人もなく本格的な登山を実行するなど、日本語がほとんど出来ないのに達者なものだ。日本の山が好きで、何度も富士山とか北アルプスに登ったとか。こちらは以前にマレーシアのキナバル山に登ったときは、ツアー専門の会社に高額な料金を払っているのに。翌日も唐松山頂で一緒になったので記念撮影をした。剣から立山がすごく良く見えた。



〔唐松岳山頂と後方は剣山〕

唐松岳頂上山荘を快晴だが水たまりが氷り、風も強く冬の装備でスタートした。夜は嵐で虎落笛のような風の音を聞きながら、牛首と称する岩場の下りで苦勞するだろうなと思案しつつ寝つきが悪かった。単独行で前後に人影もなく、滑落したら、全く行方不明。搜索のしようもなく生命保険も降りようもないなどと空想していた。

下りは予想通り長いクサリ場に苦勞した。3点支持でと称するが、実体は四つん這いで移動する。



〔お目当ての五竜岳〕

見つとも無いが確実に且つ安全に時間をかけてコースタイムの倍近い4時間もかかって五竜山荘に到着した。昼食休憩後に五竜岳を往復するが、こちらもコースタイムの倍近く時間がかかった。

山荘の食事はカレーライスで美味であった。またもや香港のお嬢さんたちと一緒に談笑した。

三日目の朝は宣伝文句では紅葉のプロムナードだそうだが、遠見尾根に下りきるまでの標高差300mはやはりクサリ場でウンザリした。この日は冬から一変して夏日になり、途中で半そでに着替えた。尾根に入ったらやはりストックが便利で、ザックに収納出来なく持参しなかったことを後悔した。やはり小屋泊まりでも大きめのザックのほうが良かった。

途中の尾根から鹿島槍の雪渓が氷河に認定され、「カクネ里氷河」と称する所が良く見えた。



〔五竜岳頂上にて 後方は唐松岳・白馬岳〕

【 行動記録 】

〔10月8日〕 長野駅前東口の八方方面行きのバス（8:20）に乗り八方バス停下車。徒歩約20分でゴンドラリフトアダムスからリフト～リフトを乗り継ぎ八方池山荘。立派な水洗トイレで用件を処理して風雨だが11時登山開始。途中のケレンや八方池を通過し、雨中で昼食を摂り3時半に唐松山荘に到着。最後の尾根で風雨強く危なかった。全身にケイレンの予兆発生。夜間に低気圧通過した。

〔10月9日〕 昨夜の嵐がウソのような快晴。気温はマイナスで霧氷の世界、冬装備で唐松岳を往復。朝食の後に8時いよいよクサリ場の連続する牛首の下り。絶対に滑落しないように3点支持で下り登りを繰り返して最低鞍部に10時に辿り着く。30分の食事休憩をして12時過ぎに五竜山荘に到

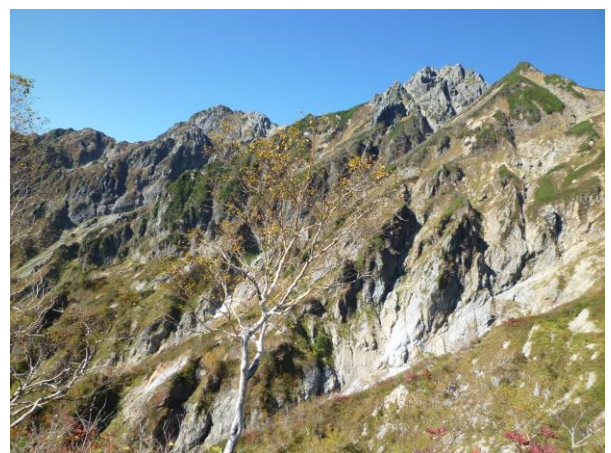
着。2回目の昼食を摂り五竜岳を3時間半もかけて往復。

〔10月10日〕 快晴で風弱く気温上昇。7時に下山開始したが、またクサリ場の連続でうんざり。五竜から鹿島槍の稜線の眺望と紅葉が絶佳。12時に小遠見山に到着し昼食。白馬岳などの眺望良く昼食後尾根を下山し、ゴンドラ（白馬五竜テレキャビン）でとおみ駅着。近くのエスカルプラザという施設から携帯でタクシーを呼び白馬駅に。ここで15:55の長野行きに乗り17時に長野駅に到着。



〔遠見尾根から鹿島槍の氷河 〕

この山旅を総括すると、台風の直前で初日は悪天候であったが、その後は快晴で秋の登山を満喫した。このルートのような瘠せ尾根の登山は、単独行では危険なのでそろそろ方針転換しなければと思う。最後に白馬駅でまた香港組と会った、不思議な縁でした。



〔遠見尾根から右の五竜岳から鹿島槍への山並〕

仏教伝来の道を旅する・シルクロード編

8期 篠島益夫

3年3回にわたる「仏教誕生の地と伝来の道をめぐる旅」は今回のシルクロード編をもって終わりました。思いを懐いてから3年の月日を要した事になりました。第一回「仏教誕生の地を旅する・インド仏跡を巡る」は「やまざと vol-31」で第二回「仏教伝来の道を旅する・ヒマラヤ・カラコルム・パミールを越えて西域南道」は「やまざと vol-33」で寄稿させて頂きました。今度の「やまざと」では第三回を報告致します。

2018年5月19日～20日・西安・兵馬俑博物館・

青龍寺・大慈恩寺など

19日関空をAM10時に出て6時間余りで曇天の西安に着いた。人口800万人の陝西省の省都で、城門や城壁が中心部で目立つ古都、市内の鐘楼見物、夕食を愉しみ、翌20日は好天の中、兵馬俑博物館1・2・3号館で圧倒された後、これを作らせた始皇帝陵へ、大きさだけを実感してから、804年に入唐した空海が密教を師の恵果から学んだ青龍寺へ。ここは跡地だけだった場所に1980年代に西安市と日本の四国4県が協力して空海・恵果の大きな記念堂や庭園を整備して1000本の桜を植樹して中国仏教会に引き渡されて維持されている。恵果と空海の真言密教はその後、中国には残らず日本で残り、中国ではチベット族中心にインドからの密教にチベット族の独自信仰が混合したチベット仏教（ラマ教）が根付いている。日本僧が入唐して伝えた経典は全て漢訳経典であり、その漢字を使って自国の文字としていた訳だから中国・朝鮮半島・日本・台湾・ベトナムなどは漢字文化圏であると言える。

西安では初唐に国禁をおかしてまでも17年に及ぶ中央アジアとインドへの求法の旅を続けて帰還した玄奘三蔵の国営の訳経場がその後大慈恩寺として残り、経典を収蔵したという大雁塔は唐代から現在まで残っている。玄奘の弟子の慈恩大師が興した唯識学の法相宗も入唐した玄奘門下の道昭により日本に伝えられている。



西安市
大慈恩寺の
大雁塔
20180520 撮影

5月21日～22日・西安市内・敦煌莫高窟・

玉門漢・陽関など

21日朝は旧西安の城壁・安定門などを散策してから西安空港から敦煌に飛んで、鳴砂山と月牙泉に向かう。月牙泉は敦煌の都市化で湖水面積が減っていた。鳴砂山は砂丘のように見えているが岩稜の山に砂が被った状態で流動砂漠のように形も風景も変わらない、ここは甘粛省の西端にあたる地で昔から西域からの異民族侵入に悩まされたシルクロードの拠点都市。

22日は莫高窟見学から始まる。撮影は外部OK、内部は禁止。著名な窟は殆ど見る事が出来たが、大乘仏教の仏像が主ではあるが阿弥陀仏像は少なかった。

清朝末に窟の隔壁の奥に別の窟が発見されて極めて多量の貴重経典、論書、仏像などが発見されたが、此処の管理を任されていた道教の王道士がイギリスの西域仏教遺跡探検家スタインやドイツのル・コック、フランスのプリオ、若干遅れて日本の本願寺22世大谷光瑞師が率いる大谷探検隊などに売り渡してしまった。西欧では19世紀からインド学、東洋学が流行り、仏教の歴史的研究も西欧で進み、インド、中央アジア、中国、日本は取り残された。特に漢訳経典に頼り、鎖国も続いた日本の仏教研究は西欧に完全に遅れていた。日本では本願寺22世門主の若き大谷光瑞師がヨーロッパ在学中にこれを知り、日本の仏教研究の近代化を図ろうとして大谷探検隊を1902年（明治35）～1914年（大正3）に3次にわたり派遣して日本の古い仏教史観の近代化を進めた。（拙著：「大谷探検隊と二楽荘の夢」に詳述）



敦煌市

莫高窟外観

20180522 撮影

辛亥革命前の混乱期の清朝が気がついた時には多くが失われ莫高窟の壁画も一部ははぎ取られて国外に持ち去られ中国からは逸散してしまった。それ等は現在、大英博物館、本願寺の龍谷ミュージアムなどで見られる。貴重資料等を売り払い金儲けをした王道士はその後、処刑された。

我々をガイドしてくれたのは莫高窟研究員の日本の美人の朱さんで、莫高窟美術図鑑も買わされてしまった。この日は莫高窟の大スクリーンでの解説から窟のガイド付き案内で印象が残っているのは22、29、16、17、57、45、96、148窟である。此の地は古代から中国と西域との天山南北の2路と西域南道の分岐地点に当り、異民族侵入の多い地域でもあり、どの王朝も厳重な関所を設けた。今回は玉門関（ホータン川で採れる玉が通る関所と言う意味もあるとか）と陽関を見学、いずれも一夜の風で地形の変わる流動砂漠地帯ではなく石、土、砂の混じったゴビタン砂漠地帯で水の確保しやすい場所に有った。詩人王維の有名な詩が自然に浮かぶような場所だ。西域探検を敢行した漢の張騫の事績が誇張されていた。



敦煌市 玉門関 20180522 撮影



敦煌市 陽関 20180522 撮影

元二の安西に使用するを送る詩 王維 作
渭城朝雨潤輕塵 い城の朝雨、輕塵を潤す
客舍青青柳色新 客舍青せい、柳色新たなり
勸君更盡一杯酒 君にすすむ更に尽くせ一杯の酒を
西出陽關無故人 西の方陽関を出れば故人なからん
新訳經典を多くもたらした玄奘三蔵
玄奘三蔵は唐の国禁を破って629年に密出国して西域とインドに仏教經典を求め645年に帰還した。往路はトルファン盆地を拠点に強い勢力を誇った高昌国王の麴文泰に厚遇を受けて人足、荷駄、

資金（金や絹織物）を充分補充して、麴文泰王の力の及ぶ南路のクチャから天山を越えて北路に切り替えて西突厥やサマルカンド、バーミヤンからヒンズークシュを越えてカシミールへ、そして南下してインドへ。長大なコースながらも途中の諸侯の支援を取り付けながら旅と經典収集を続けた。帰路は高昌国が唐に滅ぼされており、今度は唐が強大な吐蕃国（チベット国）と結んでいた。その勢力圏を辿り、インドからカシミール、パキスタンのインダス川を遡り、カラコルムのフンジュラブ峠付近を越えてタシュクルガンから西域南道のホータンに出た。しばし此処に留まり、唐の太祖に手紙を出して密出国の弁明をしたところ、太祖は大いに喜び、迎えまで出すという安全確認後に敦煌を経て西安に帰還している。

657部の經典や多数の仏像を中国に将来して唐の太祖の肝いりで訳教所（現在の大慈恩寺）を設けて、此処で残る生涯を訳経に励んだ。玄奘訳の般若心経は今も多く読経され、著作「成唯識論」は法相宗の依拠する論書の一つとなっている。

23日～24日・敦煌博物館・高昌国古城

朝から敦煌博物館に、此処では莫高窟の実物再現や生活史の立体再現展示が多く、結構楽しめた。



莫高窟第45の再現・中央は釈尊で周りには弟子と守護の二天王 20190523 撮影 博物館

トルファンへの移動は高速鉄道（新幹線）である。敦煌から新幹線の駅までバスで70分もかかる、駅に着いたら、駅に入るのに荷物検査&パスポート検査、改札では切符&パスポート、ホームに行くには重いスーツケースが有ってもEVもエスカレーターも我々には使わせない。階段脇にスロープがあり、スーツケースを引きずって階段で4階のホームまで運ぶ、途中でスーツケースを放したら下に落下して人災間違いなしだ。誰の為のエスカレーターか？電車の乗り口で、またもや切符&パスポートだ、人手のかかるテロ対策なのか？

この新幹線は甘肅省蘭州から新疆ウイグル自治区ウルムチまでの路線である。車内のスピード表示を見ると最高速でも 150k まで、おまけに駅での停車時間が長い。敦煌からトルファンの車窓からは沢山の油井が見える。ウイグル自治区はタクラマカン砂漠同様中国の資源と宝の山である。



スロープ付階段で荷揚げ・敦煌駅 20180523 撮影

新快速並み「すしずめ新幹線」で漸くトルファンに着いたら、また荷物&パスポート検査で、駅から工事中の凸凹歩道を重いスーツケースを引かずって 2k 程離れたバスまで。

トルファンはウイグル自治区でウイグル人が多いので駅には銃持ちの兵隊があちこち集まって駄弁っていた。自治区の主席は必ず共産党員で副主席は必ずウイグル人との話だったが、副主席は飾り物にすぎないというひそひそ話。モンゴル、チベット、ウイグル、チワン族、回族という大きな民族自治区を抱えて漢族の支配と多民族の被支配民という関係の固定化はこの時代には難しい筈、アメリカのような合衆国ではない点多民族と言っても社会が違う。中国が多民族国家として経済的、政治的、人権扱いに成功したら世界で立派なモデルになるだろうが、公安と軍隊と共産党が威張り散らす今の様子からは期待薄である。この日の夕食はトルファン郊外のぶどう農家の庭先で、トルファンは特にブドウ生産農家が多い。のんびりした息抜きのひと時だった。



アトラス織の民族衣装で歓迎
トルファンの農家 20180523 撮影

24 日はトルファン本命の高昌国古城を電動車で廻る、広いので主なコースを順番に廻り、めぼしいところは下りてガイドの説明を聞く。崩れかけた部分も多いが建物は形を留めているものも多い。玄奘がインドへの往路に立ち寄り引き止められつつも数十日を過ごし、説法も行ったという記録も玄奘が帰国後に纏めた「大唐西域記」に出てくる。玄奘は往路の旅の成功原因となる資金、人脈、人足、荷駄、通過国の国王への紹介状などをこの国の麴文泰王から準備して貰って成功することが出来た。麴文泰と交した「帰路には必ず高昌国に立ち寄る」との約束は玄奘の帰国前に高昌国が玄奘の母国である唐に滅ぼされて実現しなかった。

ウイグル自治区に入ると、途端に公安（日本の警察）と検門所が増える。街でもぶどう畑でも「民族融和」の看板が目立つ、それほどその逆の事件が多いからだろう。



トルファン高昌古城・大仏寺跡 20190524 撮影

トルファンは古城の他、ゼベリス千仏洞など仏教遺跡が多く、第三次大谷探検隊の吉川小一郎はトルファンを拠点に 2 年近くかけて主要地域をことごとく探査して収集物を 145 頭のラクダ隊に載せて、パオトウー張家口—天清—神戸と運んだ。彼が神戸に到着した 1914 年（大正 3）7 月 10 日には探検隊の盟主である本願寺 22 世の大谷光瑞は既に辞任しており、この時をもって大谷探検隊の第三次活動は終わった。光瑞師は教団の革新を目指しながら、仏教研究の近代化（考古学、発掘学など近代科学的手法を取り込んだ仏教史学）の為の西域探検隊の実行、日露戦争支援への教団の過大な出費と膨大な戦時国債の買い入れ、探検収集物と近代仏教僧育成の為の神戸の岡本村天王台での二楽荘建設などが絡んだ本願寺と教団の財政破綻の責任を取ったのであった。

25 日～26 日・ウルムチ国際バザール・紅葉山公園・ウイグル自治区博物館・天山天池

私達が 23 日敦煌を愉しんでいる頃、年間降雨量が十数ミリと言われるトルファン方面がかかっていない豪雨に見舞われていたらしい。24 日に高昌国古城の見学を済ませて、ゼベリスク千仏洞に向かったが「豪雨で道が崩れて行けない、戻れ」という公安の指示。中国公安は自分達の都合で観光地への入場を突然規制する。前年も西域南道のチャリクリクで泊り、砂漠の米蘭遺跡に行く予定だったが、前々日に公安から「そのツアー待った」通告をされて現地旅行社が掛け合ってもダメ、私の中央仏教学院時代の仏教史の先生がこの発掘の中国との共同事業に参加した事があるので期待していたが没となり、ホータンで予定外の連泊をして日程調整したが、今回の災害は本当らしい。火焰山も太陽の位置が悪くて景観はダメだった。中国ツアーでは想定外が多過ぎるのは日常だ。

25 日はウルムチ市内の高台の紅葉山公園から始まったが、遠くに天山が見えるくらい。植物は春榆の白い花が歩道を白く染めていた。

ウルムチから天山に向かって 2000m ほど登った天山天池（てんしゃんあまいけ）は途中の道路には雪も残って残雪の天山と大きな天池がセットで見える中国流リゾート地という感じで、人が多いのは上高地並みだが、感心するほどの景観ではなかった。多分、山が遠すぎて山が池に映るほどの見映えもないからだ。

2017 年の西域南道ツアーで中国に入って初めての町タシュクルガン（パミール高原のタジク人の町）からウルムチまで 1500k 以上をガイドしてくれたウルムチ在住の趙戒利さんをガイド仲間であつた今回の我々のガイドのムハンマド氏の知人でもある事が分り彼がスマホで趙さんに連絡してくれた。私もメール連絡でウルムチの予定を趙さんに伝えていたので、今晚ホテルを訪ねる予定だったとの事で 2017 年 10 月 26 日のウルムチ空港以来、半年振りでウルムチのホテルで再会した。



ウルムチ
天山天池

20180526
撮影

彼女は翌年 2019 年秋に初めての兵庫を旅したいと言うので、私がプランを作ってメールと電話でやり取りして手配、2018 年 11 月 8 日～12 日まで 3 泊 4 日の兵庫の旅にウルムチから出かけてきてくれた。新疆大学日本語科出身なので日本には知人も多く東京で過ごしてから帰国して行った。

彼女は「天山の花の旅」を企画して、「手配はウルムチの旅行社でする方が日本で手配するよりも安い」と言ってます。彼女はウルムチの旅行社に勤務して、中国では日本人をガイドすることが多く、日本に中国人ツアーを連れてくる時は中国人をガイドしています。

26 日はウルムチ空港から西安、青島経由で関空へ戻りました。往路に比べて乗換が増えて 12 時間ほど時間が掛かりました。

「やまざと」で今回を含めて 3 回のレポートをさせて頂いた「仏教の旅」シリーズはこれで終わりました。



六甲山森づくりボランティア
フォレスター松寿・10 周年記念誌
20190501 出版 20190910 撮影

2009 年から六甲山（東灘地区）で活動中の「森づくりボランティア・フォレスター松寿」を始めてから、今年で 10 年を迎えましたが、こんなに長く継続出来るのも一緒にやって頂ける皆様のお蔭です。

山や高原の旅を続けられるのも学生時代以降もお付き合いさせて頂いているワングル OB の皆様のお蔭に違いありません。

皆様に誠に感謝、感謝です。 終わり

『やまざと』 昨年号までに続いて、今回も、近年の外国での写真を紹介させていただきます。

その10-1：インドヒマラヤ・キナール谷からスピティ・ラホール、さらにラダックへー その前半のヒンドウ文化圏を

2016(平成 28)年の夏は、大英帝国時代の夏の首都・シムラーから北へ。酷乾のラダックと更にチベットにまたがるパンゴン・ツォー(湖)までを。文化も自然も異なる地域なので、まず、前半を。

旅はやはり、鉄道が楽しみです。ニューデリー駅には、実に様々な人たちが。妙齢の女性で入れ墨のようなのが見えたので見せて貰いましたら、今はボディペインティングの、民族の伝統との由。



インド国鉄は、駅構内も列車内でも治安に配慮で、安全です。カールカーで乗換えて、世界遺産指定の「シムラー鉄道」(狭軌、1903 年建設、標高差 1400m) でシムラーへ。右は、かつての有力者の邸宅をホテルにした Wood Vile Palace の支配人。英国紳士然たるお人柄で、ご好意により、翌早朝・食事前に、英国統治時代のシムラー総督府へお連れ頂きました。



総督府は、英国ヴィクトリア朝時代の繁栄を偲ばせる壮麗な建物。続いては、シムラーからキナール渓谷へ至る途上での、かつてのラージャ(藩王)・キナール王のパレスとその内部。さらに、ヒマラヤ山脈の中軸部を横切ることになりますが、右写真のように大渓谷中の急崖に穿かれた悪路連続。



キナール谷の中心地・カルパは、ヒンドウとチベット文化圏の混淆の地。ヒンドウ寺院の屋根越しに、雲上に僅かに覗く聖山・キナールカイラス。ここで初めてのチベット仏教寺院(ゴンパ)内部の仏様は、何となく異国風。辿ってきたサトレジ河を直上すれば、すぐ先はチベット(通境不可)ですが、左へ折れてスピティ谷へ。この続き、チベット文化圏での部分については、次ページで。



(一連の稿は、KUWV-OB会のHP中、「会報Web版」からご覧頂けますと、カラーでの閲覧が可能です。)

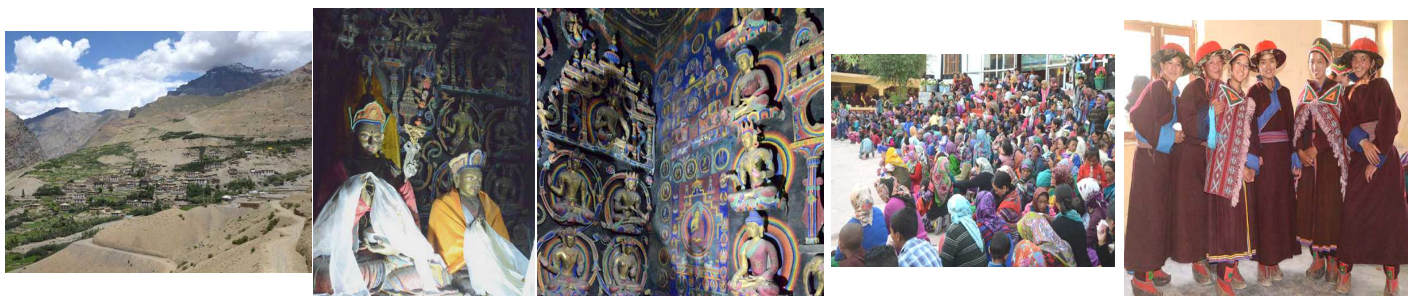
念のためのご説明：拙稿ページは、全部を筆者が作ったものです。今号からは、OB 会の現・収支状況のため、寄稿は個人4ページ・支部などは8ページ以内、写真は1ページにつき2枚までとお定めになりました。じつは、以前からですが、編集経費低減に少しは資するようにと、拙稿は上述のようにした上で PDF で提出している次第です。それゆえに、規定とは関わりなく、写真がたくさん掲出のページとなっております。HP 上でご覧頂く場合は、どうぞ拡大してご覧下さい。

その10-2: インドヒマラヤを越えて、ラダックへ — 前ページでのヒンドゥ文化圏から、チベット文化圏へ進んで

キナール地方から、ヒマラヤ主軸部を過ぎてスピティの谷に入れば、次第に緑が増えて、最初の大きな聚落のナコ村とナコ寺(「ゴンパ」と書くべきですが字数節減のために「寺」と。以下同じ)に。チベット仏教ですが、観音菩薩の面影はまだヒンドゥ風。次に、「ヒマラヤのアジャンタ」(素晴らしい壁画と仏像ゆえ)ともいわれるタボ寺へ。残念ながら堂内は撮影禁止ですが、入り口は写真可につき、その壁画を。



更に進んで、下写真右端に黄色の小さい屋根が見えてきたラルー寺(こちらも、タボ寺と同じく11世紀の大訳経官リンチェンサンポの創建)で初めて、ご好意により堂内撮影が許されました。暗闇の堂内には、壁画と見事な掛佛が。少し進んだクンリ寺に人だかりを見て入ってみれば、高僧の誕生日祝いを兼ねたお祭りでした。皆さんそれぞれ楽しげに、広場に出て踊りを披露。下は、踊りの出番をワクワクして待つ、娘さん達。



連日の好天です。谷が次第に広がったキィ村の朝。左下写真での右斜面に小さな白点で見えるのが、素晴らしい壁画と掛佛、立体曼荼羅で知られるキィ寺。撮影は、残念ながら内庭まででした。夕べには雲が払がりますが、雲間から陽が射す山肌は、地層とその褶曲模様が見事です。カザ村で。



次ページ冒頭では、クンザン・ラ(「ラ」は峠の意)4551m を越えて、ラホール谷へ。

その10-3: インドヒマラヤを越えて、ラダックへー ラダックから、更に僻遠のチベット・チャンタン高原へ

西欧からの人達やインドの人々には、我々には考え得ないような旅を愉しむ人達も見られます。クンザン・ラの前で見た、マウンテンバイク(荒野走行用の耐衝撃性能自転車)の、スイスからの夫婦と、フランスの娘さん。インドの人達は雨期で泥濘の悪路をものともせず、女性も。4500mを越える地域での雨は寒さが酷です。右は、クンザン・ラを越えたラホールの谷の中心聚落・キーロン。



キナール・スピティ・ラホールと辿って来て、タグラン・ラ 5328m を越えれば、ラダックの地。ラダックへは谷の奥から入ることになり、最初はラダック最大のヘミス寺(左写真はその内庭)。続いて、チクセ寺やシェイ寺も。5年振りのラダックの主邑・レーですが、一段と綺麗な街になっていて、本通りは見事なカラー舗装に。しかし、立派な宝飾店の前でも、昔に変わらぬ人達が市場の店開きを。



ラダックの東方は、遙かチベットへと続くチャンタン高原の一角です。まず、タグラン・ラ 5328m の東方のツォ・モリリ(「ツォ」は「湖」の意)へ。その途上に、米国 AMS の 1954 年編纂 20 万分 1 図で、この近辺ではここだけの Salt (塩水湖の意: 地図入手時から気になっていた) とあるツォー・カルに。行って判ったのは、各所に熱塩水が噴出している(左下写真)ゆえでした。遙か僻遠の地のツォ・モリリは、湖面の青が実に綺麗な。お祭りにはラダックからも大勢の人が、とのコルゾック寺も閑散の。



最後に、ラダックの東、チャン・ラ 5360m を越えて、中国との国境係争のパンゴン・ツォーへも。その途上ではヤクが草を喰み、湖岸には祈りのタルチョーが風になびく地。湖水は驚くくらいに澄んで、ずっと先の湖中の石までが鮮明に。夢の中の様な心持ちのみが、今も、記憶の中にあります。



番外:昨号では、各地で華やかに催された「白山開山 1300 年祭」についての、講演予稿を載せて頂きました。今年は、神仏習合が今に続く五箇山白山宮の 33 年御開帳についての講演予稿を。

セッション IV

日本山岳文化学会 17 回大会 2019.11.16-17 一般講演
(東京慈恵会医科大学・高木会館 2 号館にて)

神仏習合の面影を今に残す五箇山白山宮「33 年御開帳・式年大祭」の報告

長岡正利

演者は本学会 2016 年大会で、天正年間の一向一揆や明治の廃仏毀釈を経ても現代に遺った白山信仰の諸仏(うち重文が 2 点)などを紹介した。また、昨 2018 年の本学会では、伝承に拠る白山開山(養老元年、越前の修験僧・泰澄)から 1300 年目(2017 年)に、福井・石川・岐阜県などの関係の各地で華やかに催された白山開山 1300 年祭のもようを紹介した。

古来の白山信仰(白山修験)は、天台密教系の、神仏習合のかたち(十一面観音菩薩を本地仏とし、その垂迹神が白山(妙理)大権現)であった。しかし、全国におけると同様に、慶応 4 (1868)年 3 月の神仏判然令(分離令)によって、神社と寺院の分離独立とその僧侶の還俗や、仏像を御神体とすること等も禁じられた。だが、一方では、五箇山の白山宮(富山県南砺市上梨)では、神社ではあるが、その「本尊」に「秘仏・十一面観音菩薩」があって、近年は 33 年ごとに開帳がおこなわれてきた。今年 5 月のそのもようを、多くの写真で紹介する。

この白山宮は、伝承に拠れば、白山開山の泰澄が人形山に白山菊理媛命を勧請・建立したものとわれ、後に現在の上梨聚落に移設して、文亀 2(1502)年に再建されたもの(棟札の記述による)で、国指定の重要文化財である。



白山宮の鳥居前には御開帳標札と、重文説明にもその旨が。



御開帳の早朝に、拝殿と本殿鞘堂の板戸を開放。右は、本殿正面上の、鎌倉初期の様式の蛙股。



御開帳が始まって、



五箇山各地から到着の獅子舞が、次々に奉納される。



拝殿では子供達によるこきりこ舞を奉納。



地域の人達が、正装で、次々に御開帳を拝観。右仮設で宝物展示。

開帳については、養老元(717)年の泰澄による創祀と伝わる平泉寺白山神社でも 33 年ごとに行われてきており、今回は 2025 年である。

一方では、若き日の泰澄が遙かに白山を望んで登峰・開山を志したと伝わる越知山大谷寺(福井県越前町大谷寺)での開帳は不定期(近年では 1940・55・66・72・87・2003 年)で、この 11 月 2・3・4 日に秘仏多数の開扉が予定されている。

【文献】平泉澄編『泰澄和尚伝記』。白山神社蔵版(1953):『藝林』Vol.66-2(2018)に再録版あり
越中白山宮奉賛会『白山宮修理工事報告書』。同会(1954)
越中五箇山平村史編集委員会『越中五箇山平村史』上・下巻。平村(1985・1983)
越中五箇山筑子唄保存会編『こきりこーその由来と歴史ほか』。平村(2001)
平泉隆房「白山信仰をめぐる諸問題」、『藝林』Vol.66-1(2017)

上述の五箇山上梨は、高校生時代からのご縁の地でした。その例大祭は毎年です。皆様、どうぞお越しを。

ステンレス兎の現代彫刻に、オークションで100億円の値段がついた…が話題になっています。

もちろん話題になることを前提にしての、金額なのです。報道されるほど、現代アート業界でのあらたな購入層の開拓が期待できるわけですから。

「現代アート業界が一丸となって、若い才能を育てていくのだ」…と、業界人がコメントしていましたが、まさに、業界一丸となつての錬金術です。

こういうのは、「やらせ」とか「仕掛け」ともいいますね。

マグロや、果物の初競りにも、食べ物とはいえない、法外な値段がつき、それが報道されることによって、宣伝効果が生まれていきます。高額を払っても、お店は十分にペイするわけです。

たかがステンレス造形、たかが食べ物に、実体以上の値段がついても、誰も「王様は裸だ!」とは言わない。目論見通り、話題になり、仕掛け人は、してやったりになる…。

ムムム、不愉快だ!!



植物区の中で最小のケープ区
(ケープタウンにて 2019年8月23日)

「民」とは、「黒目のない目と針を組み合わせ、針で突いて目を見えなくした奴隷を表した字です。のちに、「無知でものごとがわからない多くの人々」「支配されている人々」の意味になりました。現在は「一般の人々」の意味です。

最近、ますます、この意味の通りになってきた

ようです。誰もが、スマホの画面に釘付けになっている。スマホで、「賢くなった錯覚」を持ち、匿名で発信して、一人前になった気になる、それでいて、評価を気にする…。

そんな評価が、意図的に操作されている…が、今度はニュースになっています。やらせレビューというのだそうです。

元々、公平に投票されていると考える方がオカシイと、へそ曲がり気味の私は思ってきましたので、わざわざニュースになったことの方に驚きました。

そこまで、みなさんは、今の情報システムが公正だと、思っていたのでしょうか? 「新しい=善」として、疑わなかったのでしょうか?

これまでも、民主主義の名のもと、圧力をかけて投票させるとか、何度も重複投票するとかの裏工作で、「地元の〇〇 十選」などが、選ばれてきました。今の電話アンケートや、選挙の出口調査も、公共報道できるレベルの裏付けはないのに…と私は思っています。

フェイスブックだってそうですね。「実名で登録しているから、安心」と答えられた時には、何を根拠に? と、啞然としました。そのうえで、「あなたの分も登録しておいてあげた」を聞いた時には、絶句です。安心と答えていながら、真逆のことをやっている。それでも自分は親切だと思い、新しい世界にチャレンジしているし、「トモダチ」の輪を作っていると高揚している…。やれやれ…。

一国の大統領が、ツイッターで発言する…これも、目が点になることです。それに世界のマスコミがピンピン反応するから、なおのこと、調子に乗るんでしょうね。(臆することなく発言できる日本に生まれたことに、感謝!)

彼には、大国の代表者であるという真の自覚を持ってほしいし、一方マスコミには、これは公共の場での責任発言ではない! という毅然とした態度をとってほしいです。

これらのことに立腹する根本原因は、自分が加齢したからかもしれません。どこを向いても「ああ、幼稚!」と感じてしまいます。自分が確固たる基準を持っているとまでは思いませんが、現在の「情報過多」を、私は「ほぼ攪乱」と受け止め

るようになりました。あらためて、「百の情報、一体験に如かず」を心しています。

さて、この夏、南アフリカ共和国のナマクワランドに行ってきました。「砂漠に奇跡の花園が出現！」とされる地です。

スピードや標高にこだわれなくなって、今は花追いで、「フィールドに出る」を維持できればいい…になっています。花探しは、ゆっくりでないとやれません。これが、遅くなった足とつけた折り合いです。ことに、北陸の場合、雪解けの花を追って標高をあげていけば、夏山にむけてのグレードアップが、楽しみながらやれます。

かつて、海外の山トレッキングは、日本にはない標高に立ち、日本では見られない氷雪地形を見るのが目的でした。そうすると、ポーターが主な荷物を運んでくれるにしても、加齢によるハンディは大きく出てきます。それで、海外についても、かなたに秀峰を眺めながら、中腹の花を楽しめるようなコースを物色するようになりました。

その路線でいこうとすると、北半球の場合、6月下旬から7月上旬が花の最盛期になります。一般的には9月上旬まで、次々と開花していくわけですが、その頃には草丈は間延びし、背景の秀峰の雪は減り、日差しは陰り…となり、やはり、初夏が一番の花の狙い時です。

でも、まだしがみついている職種の場合、期末テスト時期に重なり、ああ無常！と、悶々。ところが、南半球のナマクワランドの場合、春に相当する、8月中旬から9月上旬がベストとなっています。それなら、夏季休暇の終盤に丁度となるわけです。

私の場合は、行ける時点でのベストを探し、それで納得しています。憧れを先にして「行けない」になれば、かえってストレスの種になります。その時点での、青信号が並んだ先にあるツアーが、その年の行き先になるという順。これも、ストレスを溜めない、加齢の知恵です。

ベストであるなら、航空運賃が高い時期だけだなあ…にも諦めがつくのです。

その航空運賃について、参加可能なツアー間（これも煩悩防止のため、2社のみのカタログに限定）での、エコノミーと、プレミアムエコノミーの差がわずかでしたので、初めてプレミアムエ

コノミーでの参加となりました。ところが、別パンフレットではビジネスクラスも募集しており、結果、ビジネスクラス客の方が多いうツアーに紛れ込むことになってしまいました。



ライオンズ・ヘッドとロベン島
(ケープタウンにて 2019年8月23日)

「南アフリカは3回目」とか「これで、142か国目」などという驚愕の「場違い話」の方は、私的紀行のメインテーマにしました。ただ私にとっては、カラパタールやキリマンジャロの方がもっと憧れの頂きであり、夢を叶えていたわけですから、気楽に、「凄いですねえ」と応答していました。

昔も、「行ってみたら、絵葉書と同じだった」の感想は笑われたものでした。五感をフル回転して、現地体験をしないと、使ったお金の価値はできません。

その点では、ググったとしても、観光地については、誘客の都合があり、ベストシーズンのベストシーン情報ばかりが載っているのは同じです。

こんな時代の紀行は、なおのこと、そんな表（＝綺麗ごと）には出ない側をしっかりと見て、自分にはこう見えた…である方が、多少は伝える意味があるということになります。

さて、「砂漠に奇跡の花園」は、たいてい、オレンジのナマクワデイジーに埋まる景色が、出ています。砂漠に3週間だけ花園が出現し、開花結実した後は、また砂漠に戻ってしまう…を、「奇

跡」と表現しているのです。

なぜ、そうなるのか？

まず、世界のバイオームは、気温と年間降水量で12区分し、「熱帯多雨林」「雨緑樹林」…「サバンナ」「ステップ」「ツンドラ」「砂漠」などと表示します。

対して「植物区」は、植物相を6区分したもので、地続きのユーラシア、北米などは、大きく「全北区」に入ります。さらに「新熱帯区」(＝中南米)、「旧熱帯区」(＝アフリカ、インド、東南アジア)、「オーストラリア区」(＝オーストラリア)、「南極区」と分かれ、最小区分として「ケープ区」があるのです。

「ケープ区」は、砂漠地帯で周囲と隔絶されているが、大西洋の冷たいフォークランド海流で生じる靄や、冬のわずかな降雨によりもたらされる水分があることによる小灌木主体の植生です。9,000種の植物があり、うち、7割が固有種といわれています。

ちなみに「ルイボ스티ー」はカフェインがなく、VCが豊富とあって、女性に人気ですが、南アフリカ特産で、クランウィリアムス周辺でしか自生しない珍しい植物のお茶です。「赤い低木 (Red Bush)」を語源とし、常緑灌木そのもの…ケープ区を代表する植物の一つです。先住民のサン族(かつてのブッシュマン。ブッシュマンは差別語となり、使えない)が、昔から薬草として重宝していたそうです。

2004年に、「ケープ植物区保護地域群」として8つの保護地域が世界遺産に登録されました。テーブル・マウンテンの南側斜面に広がるカーステンボッシュ植物園は、学術研究も行っている本格的な植物園です。今回のコースの中で寄った、グーキャップのヘスター・マラン・ワイルド・フラワー庭園も、キヴァーツリーや多肉植物を展示しています。これらが、「ケープ区」を知るための本命の施設です。

自分でも、簡単な英字パンフレットを買い、また、厚い図鑑風を見せてもらいました。さらには、国立公園内の展示も見ました。それらは、常緑灌木系をメインとし、デージー系は、添え物でしかありません。



植物園のキヴァーツリー
(グーキャップにて 2019年8月26日)

少なくとも、「ケープ区＝奇跡の花園」ではありません。「奇跡の花園」はケープ区に入っているゆえの現象ですが、さらにヒトの手が入ったうえで生じている花園といえます。

今回の花巡りは「ウエストコースト国立公園」(約32,000ha)、「ニューポートビル国立公園」(約115ha)、「ナマクワ国立公園」(約140,000ha)、「グーキャップ自然保護区」(約15,000ha)の4箇所でした。

これらが並ぶ国道7号線は、フラワーホットラインと呼ばれ、地元民も花の季節には、ドライブを楽しむそうです。

そんな「ナマクワランドの花」情報が、カタログで目につくようになったのは最近。日本についての初情報らしきは、福音館書店発行の「月刊たぐさんのふしぎ 2015年11月号 神々の花園」ではないか？と思います。

その本に一番掲載されていたのが、「ニールさんの放牧場」でした。特徴的な立木が確認でき、ニューポートビル国立公園のメインの畑がそれだと判りました。

なんと、柵の中だけの花園です。花もややまばらに、高茎系になっていました。

もともと、奇跡の花園の出現は、その場所に7月(冬)に降雨があったかどうかによって左右され、咲かない年もある…とされています。だとしても、柵の中だけに雨が降る…などはありえません。あの本の別天地のような花園の写真は、ニール氏が

放牧をやめた途端、デージー類が進出してきて、一時的にできたもの、そして今は灌木を排除しながら柵の中だけで維持している光景だったわけです。

ワングルのみなさんなら、湿原が乾燥化して、草原に、さらに低木林に「遷移」していくのは、実体験として知っていることですね。

こちらの本来の植生は、常緑の低灌木です。それらが牧場経営で一掃されて、さらに放置された後、まずデージー類が進出してきて、奇跡の花園を形成したわけです。

もし、本の記述通り、天然状態でも、1 平方mに 15,000 個の球根が見つかるくらいなら、人為的な柵の外も花園であるはずですが。柵の内と外（ただの草原）で明らかに違い、柵の中だけ花園状態を、どうして、神業と称することができるでしょう？ 付近の、花に埋まる街も、よく見れば、花に埋まる庭と、埋まらない庭があり、明らかに、人為といえる差が認められました。

あまりに有名になり、国立公園に昇格させて維持し、観光客を誘致している…ようです。

（という説明は、聞けませんでした。日本のツアー会社にとっても、商売なのですから）



デージーとオリックス
(ナマクワランドにて 2019 年 8 月 26 日)

次のナマクワランドは、もっと広大でしたが、そこも明らかに牧場の跡地でした。

結果的には、開花時期を「当てた！」になりましたので、それは非常に嬉しかったのです。ただ、「当てた」お蔭で、同じようなオレンジの平原は、またはるかむこうに、区画としてあるだけ。同じ

気象条件であるはずの周辺が、花園にはなっていないことが、かえって歴然すぎるほどでした。

デージー系の、一面に咲く状態となる背の低い花が主体になるためには、灌木の一掃が必要で、それには人の手が入る…。つまり、奇跡の花園とは、「ケープ区における里山」ということです。

ちなみに、スイスのメルヘンチックな花畠は、牧草を刈り、人の手で維持されているもの。ニュージーランドの草原も、先住民が山を焼いて大型の鳥類を狩り出した…その後に出現し、移民によって格好の羊の放牧地になった風景でした。

自然と言うけれど、「奇跡の花園」なんていうけれど…人が住めそうな気候での平原は、すでに人の手が入ったうえで、さらなる都合でそうなっている…ということなのです。

日本では、三伏峠も、伊吹山も、入笠山も、今では柵の中に高山植物は囲われて、やっと命を繋いでいます。



シャカイハタオリドリ of 巨大な巣
(ナミビアにて 2019 年 8 月 27 日)

「奇跡の花園」という「やらせ」「仕掛け」で、誘客をしているけれど、見方を変えれば、ナマクワランドの花達は、日本よりもっとたくましい。昆虫に次いで今度はヒトを操り、エリアを広げ、延命しているのです。

「自然」は、AI を越えているのかも？！

富士山ゼロメートルPW 報告

15 期 増田 富雄

この夏、70 歳を目前に控えた 4 人の男たちが、海拔ゼロメートルから日本最高峰に登ろうという、現役生でも考えられないような破天荒な山行を計画し成功させました。標高差 3,776 メートル、踏破距離 42 キロ、3 泊 4 日の大挑戦でした。



〈挑戦者たち=左から増田、上馬、松林、坂尻〉

まず、私がなぜこの PW を企画したのか、から始めたいと思います。

私が 2～3 年前に東海道を駿府から江戸に向かって歩いていた時に何度か、道路にペイントされた『富士山登山ルート 3776 富士山へ、0 メートルからの挑戦』の標識を見つけました。昨年、坂尻君と上馬君が富士山 0 合目からの登山ツアーに申し込んだものの台風で中止になった、という話を思い出して、富士市のホームページを調べてみることにしました。このルートは富士市が企画・設定して 2015 年 7 月 10 日にスタートしたのですが、最初の 2 年間は広報発信力も弱く、地元以外にはほとんど知られていませんでした。それが昨年から年間 200 人余が挑戦するようになり、今年は 400～500 人になったのではないかと、思っています。ちなみにゴール後、富士市役所から私のところに届いた【挑戦達成証】の番号は“第 1－430 号”でした。

6 月、「富士山登山ルート 3776」の情報収集と資料集めのため富士市役所富士山観光課に行き、担当者から詳しい説明を受けました。市もこの企画成功に本気で取り組んでいることを強く感じることができました。

また自分自身のことですが、14 年前に脳梗塞で

半身不随になり、退院後もジムでリハビリを兼ねたトレーニングを続けてきましたが、山登りはできないものと諦めて四国お遍路や東海道などロードを歩いてきました。しかし心の中では山登りを再開したいという気持ちもあり、長年のトレーニングの成果も見てみたかったのです。

坂尻君、上馬君に松林君も加わり 3 泊 4 日（予備日 1 日）の山行が決定しました。ロードが専門の松林君は山登りには不安を感じていましたが、全行程 42 キロのうち 28 キロがロードであることから参加を決めたものです。

〈メンバー〉坂尻忠秀・上馬康生・松林知一・増田富雄（全員 15 期）

〈日 程〉2019 年 9 月 1 日（日）～4 日（水）

〈コース〉

- 9/1 JR 吉原駅～田子の浦海岸～富士塚～吉原商店街～曾比奈バス停～よもぎ湯～農家民宿やまぼうし（標高約 500m）
- 9/2 やまぼうし～石油採掘跡地～ふじひのきパーク～表富士グリーンキャンプ場（標高約 1,200m）
- 9/3 表富士グリーンキャンプ場～旧料金所ゲート～ガラン沢～山体観測装置～新七合目御来光山荘（標高約 2,750m）
- 9/4 新七合目御来光山荘～八合目池田館～九合目万年雪山荘～浅間大社奥宮～剣ヶ峰山頂～お鉢巡り～富士宮口五合目バス停～三島駅



〈海拔ゼロメートル、田子の浦からスタート〉

行動記録

8 月 31 日（土）

夕方、静岡駅構内にあるおでん屋で Pw の成功を祈念し乾杯！

9月1日(日)快晴

朝7:06の東海道線に乗り7:50吉原駅に到着。スタート地点の富士塚(スタンプラリー起点)まで歩き、更に少し歩いて田子の浦の海岸まで。坂尻が用意してきたペットボトルに海水を汲む(頂上に帰すため)。海拔0メートルの証拠写真を撮り、富士塚に石を積んで登山の無事を祈る。

8:30富士塚を出発し旧東海道を西に進み名勝左富士(江戸から京都に向け歩いてくると常に右側に見えていた富士山が1ヶ所だけ左側に見えるためこの名がついたもの)から吉原商店街を抜け富士市役所方面に進む。

松林と私は旧東海道を歩いていたので懐かしさも加わりコースタイムが膨らむ。その後は真っすぐに北に、ひたすら歩くのみ。アスファルト舗装の道で緩やかながらもずっと登りが続くうえ30度を超す暑さで途中のコンビニで買ったペットボトル4本があっという間になくなった。炎天下の中をさらに進むと家並みもまばらとなり、13:00よもぎ湯前を通過し14:00本日の宿である農家民宿やまぼうしに到着(標高500メートル、スタンプラリーポイント)。本日の歩行距離14.5キロ!

民宿やまぼうしはその名の通りヤマボウシの木に囲まれた山本さんが経営する民宿である。着くと冷たい水とお茶で接待してくれ、かつ洗濯までしてもらい大感激!晩ご飯は新鮮な地鶏と山菜で明日の英気を養った。

9月2日(月)快晴

7:00朝ご飯をゆっくり食べスタート。今日のコースはもはや民家もなく、ただひたすらアスファルトの林道と富士山スカイラインの登りを歩く。途中1ヶ所しかない水場での補給が重要である。



〈ゴールは遙か彼方=1日目の宿泊地から〉

8:50水場の石油採掘跡地(誠信会ふくしの里)に着。戦時中物資特に石油不足となり、富士山を掘っていけば石油が出るのでは?極端に言えば地球の裏側くらいまで掘れば出るのでは?というようなお伽噺のように採掘した跡らしい。

10:05ふじひのきパークで休憩。道すがら単調な林道ウォークの中で上馬から木や草花と野鳥の話を聞きながら楽しく歩く。

10:50天照教社で休憩。今標高が高くなってきているため昨日ほどは汗をかかない。

11:30少し日陰があったためその場所で昼食休憩。あと1時間くらいで本日の宿に着くためゆっくりと横になる。歩き始めようとするとう坂尻が松林のザックの左右のバランスが悪いことに気づき紐を締めなおしてあげたのを見て私のも見てもらおうと松林よりもっとひどい!と言われバランスを直してもらった。実は今回富士山用に37リットルのザックを買ったばかりで初めて使用するためバランスや紐の締め方、長さ等なにも調整してなかったのだ。



〈2日目の宿泊地・表富士グリーンキャンプ場〉

13:00表富士グリーンキャンプ場到着。(標高1,200メートル、スタンプラリーポイント)本日の歩行距離13キロ!

チェックインは午後2時であるが融通を利かせてもらい、コテージの鍵と調理道具・椅子テーブル等を受け取り4人でコテージへ。少し休んだ後、シャワーで汗を流し夕方バーベキューまでゆっくりする。ガスが次第に濃くなり小雨模様になってきたので屋根の付いている調理場へ移動しバーベキューをする。9月に入り平日でもあったため利用者は少なく、調理場を使えたのはラッキーであった。

ここでは坂尻が“板さん”として大活躍をし、富士宮焼きそばだけは静岡出身の私が担当する。バーベキューの大失敗は翌日昼飯用にと用意して

いた冷凍焼きおにぎりを焼かなかったことである。お陰で翌日は解凍状態の水分のないぱさぱさの昼飯となったのである。

コテージは4人用だったが、狭いうえマットが湿っていて何となく気持ち悪いのと暑さでたまらなかったが、それでも疲れていたため知らぬ間に眠ってしまった。

9月3日（火）快晴

5:00 起床してすぐ昨晚作っておいたベーコン・レタス・トマトパニーニ（ハンバーガーみたいなもの）を食べ出発準備。

6:00 出発しようとした時コテージの中に忘れ物を発見！何と坂尻の生命維持装置？であった。坂尻にもおっちょこちょいなところがあるのを知り変に安心した。

7:25 富士山スカイライン旧料金所ゲート（二合目あたりか？標高1,460メートル）で休憩。坂尻と上馬はここでウォーキングシューズから登山靴に履き替える。ここから山道に変わるが最初はなだらかな歩きやすい登りである。

8:55 ガラン沢到着、休憩。樹林帯からガレ場の多い景色に少しずつ変化し、ルートも沢筋から尾根筋に変化していく。

9:50 御殿庭下（標高1,980メートル）休憩。腹が空いてきているためそれぞれ行動食。私は昔懐かしいコンデンスミルクをチューチュー！

11:15 御殿庭中で休憩。昨日焼き忘れたぱさぱさの冷凍焼きおにぎりを食べる。松林は完全に疲れスピードダウンの状態のため3人で少しづつ松林の荷物を分ける。松林は水分のないおにぎりが食べられないため私の飲みかけのコンデンスミルクを渡しチューチュー！



〈富士山頂を見ながら宝永火口縁に行く〉

12:00 宝永第二火口縁で休憩。砂礫の道が続くため歩くたびに少し滑って戻る感じで精神的に疲れる。宝永山の火口の大パノラマを右に見ながら富士山頂が段々と大きくなっていく。あと1ピッチで六合目宝永山荘・雲海荘である。

12:30 六合目宝永山荘・雲海荘（標高2,500メートル、スタンプラリーポイント）休憩。全員水分補給と行動食を食べる。

松林は疲れて飲み込みが悪いため上馬が持ってきたゼリー食品をもらいチューチュー！

ここで突然松林が「もう無理だ。ここで自分は下山する。3人で登山を続けてくれ！」と音を上げた。松林の荷物を更に3人で分け予約してある新七合目御来光山荘まで取り敢えず行くことで説得し出発。

14:45 新七合目御来光山荘（標高2,780メートル）到着。着いて荷物を自分の寝床におくと入口にある食堂へ4人で集まる。

松林が今日のお礼だとして高価な缶ビールを奢ってくれ乾杯！晩ご飯は富士山山小屋ポピュラーのカレーライスを食べ就寝。夏山ピークを過ぎていたため4人ベッドを2人で寝られ熟睡。

9月4日（水）快晴

3:00 起床。起きてすぐのご飯は唾液も出てこないし食欲もわかないがペットボトルのお茶で流し込むように食べた。

3:45 出発。ヘッドライトをつけて歩き始めるも松林の足元が覚束なくなり20分で最初の休憩。松林の荷物をまた3人で分け、歩き始めるも20分ほどで進まなくなり休憩。3人で励ましながらゆっくりゆっくり登る。

4:45 元祖七合目山口山荘（標高3,030メートル）到着。

ここで松林からどうしても下山すると言って引き下がらないため私が松林と行動を共にし下山すると提案。そして坂尻から強烈な励ましの言葉があった後、松林の荷物をここに置き松林は空身で登る提案があったため上馬と私が賛同し、どうにかパーティを分裂させないことができた。

これにより下山ルートは当初計画では御殿場ルート（大砂走ルート）であったが登りと同じ富士宮ルートとなった。

5:15 御来光を迎える！



〈七合目からの御来光〉

6:00 八合目池田館（標高 3, 220 メートル）到着。
かなりスローペースになりながらも砂礫と大きな溶岩が広がる足場の悪い場所を進む。

6:55 九合目万年雪山荘（標高 3, 400 メートル）到着。気力を振り絞り赤茶けた溶岩塊の急登を登る。



〈富士山頂に田子の浦の海水を帰す〉

7:45 九合五勺胸突山荘（標高 3, 550 メートル）到着。頂上の鳥居が目の前に迫り最後の石段の登りである。空気が薄いため呼吸が荒くなる。

8:30 頂上富士館・富士山本宮浅間大社奥宮（標高 3, 710 メートル）到着。ヤッター！！よくぞ頑張った4人のワンダラーよ！！

奥宮前で記念撮影しお参りした後、剣ヶ峰頂上まで4人でワンデリング。

9:00 剣ヶ峰山頂（標高 3, 776 メートル）到着。坂尻が田子の浦から持ってきた海水を故郷の二等三角点に戻し富士山の恵みに感謝した。疲れ果てた松林を残し3人はお鉢巡りにスタート。空身であったせいもあるがコースタイムより30分も短い50分で頂上富士館前に戻る。

11:00 下山する若者グループから水を1人500ミ

リリットルずつ分けてもらい富士宮口五合目着を14:35 目標に下山を開始した。

順調に下山中八合目池田館を過ぎてから私が2回転倒した。2回とも尻もちの後、前側に倒れ手をついた。2回目は手と足だけでなく顔（鼻の下と顎）も岩にこすり休憩となる。リハビリを兼ねたトレーニングを長年やってきてお遍路や東海道を歩いてきたが、やはり未だに右半身全体、特に右足の踏ん張る力が足りないのだということを実感させられた。残念だが自分自身の力を認め今度は私のザックを松林に背負ってもらい元祖七合目山口山荘まで空身で歩く。ここまで天候には恵まれすぎるほどだったが、下りの途中から小雨が降り出し本格的な雨模様になる。

残してあった松林のザックを回収し、私の荷物の一部を坂尻と上馬に持ってもらい新七合目御来光山荘、六合目宝永山荘・雲海荘を経て

14:20 富士宮口五合目到着。入山料1人1,000円を払い記念バッジを貰う。

14:35 三島駅行き富士急バスに乗り16:57 三島駅から新幹線こだまに乗り車内で“富士山ゼロメートルPw”の成功と全員の健闘を祝って乾杯をした。バンザイ！！バンザイ！！バンザイ！！

松林が「3人には本当に感謝する。お陰で一生の思い出ができた。ありがとう！」と言った時には涙が出て止まりませんでした。本当にお礼を言いたいのは私自身だから・・・！！

坂尻君、上馬君、松林君ありがとうの言葉しか見つかりません。本当にありがとうございました。



〈標高差 3, 776 メートルを踏破＝富士山頂〉

令和の時代になり平成とは時代の流れも大きく変わろうとしている感じがします。医療分野では、ガン治療において人間の知性を超えた治療用会話システムであるAIのWatsonが生まれ、治療成果に大きな進展をもたらしているようです。車の運転もAI技術で補佐されるようになり、アップル社のスマートフォンであるiphoneのCPU【A12Bionic】は、パソコン用のCPU【i7】にまさるとも劣らないまでの性能になっています。30年前のNASAの大型コンピュータなみの機能が1台の小さなスマートフォンの中に実現されています。漫画のアトムのような50年前には夢でしかなかったロボットが現実には造ることができる時代となってきました。

最後に寄稿頂いた皆さまにはページ数、写真数の削減などで無理を申しましたが、ご協力を賜り、誠にありがとうございました。原稿を書いて頂いたOB・OG・現役の皆さんに心より感謝申し上げます。

北國銀行 本店 普通預金 No. 223703

◇今年も「やまざと」を発行できたのは、「やまざと」を毎年心待ちにしている人が少なからずいらっしゃるためだと思います。山関係のことで「やまざと」に原稿を投稿してみたいと思われる方はいつでも原稿を受け付けていますのでメールで送っていただければ幸いです。

森のうた

一、キミは覚えているかい？

雨上がりの森のにおい

氷りだす月

オレンジに染まる谷　くだったこと

ボクは　ほしい

雲のように

変わりつづけるころ

二、ボクは持っているかな？

峰の奥の空の深さ

鳥の孤独

あの山でキミがつぶやいた言葉

ボクは　ほしい

オオシラビソの

立ちつくす激しさを

三、キミは知っているかい？

にこ毛そよぐブナの森を

山靴の夢

倉谷のタムシバの花の白さ

ボクはほしい

カタクリの

日なたに躍る気持ち